目次

嗚呼聖應院日生上人

佛法の要行（下卷）……本多日生

日蓮大聖人六百五十遠忌を迎へて

普く皇國の志士に檄す……河合陟明

記事

○本多日生上人御病床略誌

○各地教報

○讀者の聲

○誌料領收

第三十六年四月號

清明講座

聽講員募集

講目　法華經

講師　小林一郎先生

會場　洗足池畔　清明文庫

省線五反田驛にて池上電車に乘換同線洗足池驛下車北方約二丁

省線大井驛にて目黑蒲田電車に乘換同線洗足公園驛下車南方約三丁

省線目黑驛にて目黑蒲田電車に乘換同線洗足驛下車南方約五丁

日時　毎週日曜日午後二時ヨリ二時間

期間　三月十五日開講　來年十二月講了

聽講料　毎月分納　金一圓　一年分前納　金六圓

二年分前納　金拾圓

聽講希望者ハ氏名住所及職業ヲ記入セル書面ヲ以テ本會事務所ニ申込マレタシ

昭和六年三月一日

東京府馬込町三二三六番地

財團法人　清明會

電話荏原三八三九番

振替口座東京四四七六六番

統一定價	
一部	金貳拾錢　送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢　送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢　送料共

統一廣告料	
表紙一頁	金貳拾五圓
一頁	金九圓
半頁	金四圓
四分一頁	金五圓

前金之事

昭和六年二月廿四日印刷納本
昭和六年三月一日發行（第四百三十二號）

編輯兼發行人　磯部滿事

印刷人　鈴木日雄

印刷所　都印刷所

東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地

電話高輪六〇二四番

發行所　統一發行所

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地

振替東京五一〇七一番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

不許複製

嗚呼聖應院日生上人

日生上人ハ慶應三年三月十三日姫路市坊主町國友家ニ出生、十三歳同市妙立寺池田日昌師ニ就テ得度シ聖應ト號ス天資英邁、神悟發明、夙ニ將來ヲ囑目セラル、幾何モナク日昌師遷化セラレタレバ備前ノ學匠兒玉日容師ニ隨身シ、又漢學ヲ西毅一氏ニ學バル、十八歳ニシテ堺市妙滿寺住職ニ任ゼラレタルモ二年ノ後上京シ哲學館ニ學バル。

明治二十二年三月姫路市妙善寺住職ニ任ゼラレ仝夏東京淺草盛泰寺住職ニ轉ジ其後圓常寺慶印寺等ニ住職又ハ參任タリシガ明治二十五年二十五歳ニシテ宗門ノ腐敗墮落セルヲ慨シ挺身宗門ノ大改革ノ大旗ヲ翻ザス。

仝年十二月十七日今ノ報恩閣ノ前身第一宗義布教所ヲ設置シ、翌廿六年岡山市ニ第二布教所、津山市ニ第三布教所ヲ新築サレ、廿七年秋、神戸ニ第四布教所ヲ開設サル。

明治廿八年本願寺島地師等數年前ヨリ計畫ノ各宗統合運動ニ就テ、上人ハ能ク日蓮大聖人不磨ノ大主張タル四箇格言ト謗法嚴誡ヲ高唱シ、信仰ノ大節義ヲ放却スルガ如キ無意義ノ統合ヲ拒絶シテ大ニ佛教界ノミナラズ一般ノ宗教界ニ一大覺醒ヲ與ヘラレタリ、是レ實ニ常樂院日經上人以來、我國信仰界ニ於ケル一大偉觀ナリ。

明治廿九年十二月人心教化ヲ目的トスル統一團ヲ設立。

翌三十年五月當妙國寺住職ニ任ゼラル、妙國寺ナルモノハ宗祖ノ直信日本第一ノ女人日妙聖人ノ子妙國尼ノ創建ニカヽリ天目上人ノ開基ナリ。

明治三十一年十一月十一日顯本法華宗ノ宗名公稱認可セラレタルハ日生上人ニ俟ツ。

明治三十三年三月管長事務取扱ヲ拜命。

明治三十五年五月大僧正ニ叙セラレ。

明治三十八年五月空前ノ大多數ヲ以テ管長ニ當選シ爾來滿二十有七年間管長トシテ本宗ノ教學ヲ督勵サレ、國家社會ニ對シテ其功勞甚大ナリ。

明治四十二年一月日蓮主義ノ研鑽ヲ目的トスル天晴會、次デ婦人教化ヲ目的トスル地明會ヲ組織サル、

翌四十三年夏經典研究者ノ爲メニ講妙會ヲ興サル。
明治四十五年四月統一閣竣成。
大正四年六月日蓮門下六宗團統合成立。
大正六年三月大藏經要義第一卷出版、其他法華經講義、法華經の心髓、法幢、日蓮主義精要等幾十種ノ著書ハ等身ヲ超ヘ月刊雜誌トシテ「統一」幷ニ「教」アリ。
大正七年三月勞働者善導ヲ目的トスル自慶會ヲ組織サル。
大正十一年十月日蓮大聖人現滅會ニ當リ朝廷ハ其護法愛國ノ赤誠ヲ賞シ立正大師號ノ追諡ヲ賜フノ大事ヲ成就サル。
大正十五年五月九期ノ管長ヲ辭任サレ更ニ彌々君國教化ノ爲メニ奮戰健鬪スベク昭和三年七月知法思國會ヲ創設サル。
仝年十一月　今上陛下御即位ノ大典ニ當リ多年社會教化ノ法勳ヲ以テ特ニ天盃ヲ恩賜セラレ、又文部省ヨリモ多年社會教育ニ盡瘁シ其効績顯著ナルヲ以テ表彰狀及ビ桐花硯箱ヲ賞與セラル。日生上人十六歲初轉法輪ヨリ今春一月ニ到ル五十年其間實ニ一萬數百ノ法莚アリ亦偉ナラズヤ。
昭和四年正月ノ頃ヨリ健康上若干ノ異例ヲ拜セシガ醫藥ノ奏効薄ク漸次病進ノ傾向アリ、昨秋ヨリ特ニ安靜ヲ續ケラレシガ本年二月下旬頃ニ病勢募リ吳博士高橋侍醫ノ診斷ト新谷主治醫ノ献身的努力モ遂ニ水泡ニ歸シ三月十六日午後四時二十七分一同唱題裡ニ安詳トシテ大遷化遊サル、病名ハ癌腫性胃潰瘍ナリ、世壽正ニ滿六十四歲、嗚、法國ノ爲メ眞ニ痛嘆ニ堪ヘザル所ナリ。合掌

南無妙法蓮華經

佛法の要行（下卷）

目次

四、信仰の要義　五、精進の要義　六、智慧の要義

大僧正　故本多日生

四、信仰の要義 (2)

それから此の壽量品の釋尊を信ずるといふ事が非常に都合が好いのは、歴史の釋尊であるが故に、釋迦如來に關する一切の事柄、一代の御言動といふものが、皆直接吾等の教訓となつて來るのである。釋迦如來が御誕生なさつた時には斯うであるとか、何處で說教をなさつた時には斯うであるとかいふ、釋尊一代の經歴、それが汎く一切經に現はれて來るのであるが、その釋尊の身に現はれる事柄が、みな自分の信ずる中心の佛の話である。これが若し阿彌陀樣を信心して居るとすれば、釋迦如來の御誕生ならやといつても、直接阿彌陀樣に關係がない、釋迦如來に斯ういふ有難い事があつたと言つても、それは阿彌陀樣と緣が切れてしまふ、さうして阿彌陀樣の事は吾等衆生に直接の關係が無い、たゞ阿彌陀樣が願を立てたといふ事だけしかない、ナンボ言つてもそこへ行かん限りには緣が無いといふことになる。ところが壽量品を信じて居れば、この廣大無邊なる佛法のあらゆる經典に現はれて居る釋尊の言動が、悉く採つて以て我が信仰の材料となる譯であるから、どれ位有難い教であるか判らない。

然るに今日ではあまりに無知識な、無教育なる者の間に佛教を弄んだが爲に、實に低級なるものにな

つてしまつたのであるけれども、今後の宗教といふものは、相當思想の批判の上に立つて行かなければならぬ。又いま一段は無宗教の思想と闘ふ時代が續くであらうけれども、無宗教思想なんといふものは一時の流行ものので、必ずやこれは兜を脱ぐにきまつて居るものである。既に今日露西亞などに就いて考へても、革命の當初は猛烈に宗教を排斥して、教會を破壊したりやつたけれども、それでは人民が承知しない、今總に規則として殘つて居るのは、寺院教會は主義として存在を許さないと言つて居るさうである、けれどもそれはその寺院教會に附屬して居る信者の一人も反對せざる場合に於てこれを破壊するといふことになつて居る。信者が一人も反對しないやうな教會ナンといふものはあるものではない、必ず信者があれば、その教會を潰すと言つたならば「それはいけません」と言ふだらう、一人でも反對があつたら潰さないといふ以上は、どの教會でも潰すことは出來ない。だから今日露西亞で宗教を許さぬといふやうなことは、嘘を吐いて居るのである。「一人も信者の無い教會は存立を許さぬ」……、それなら許すも許さぬもない、一人も信者の居らぬ教會なら、宗教はありはしない。だから露西亞のあゝいふ宣傳は實に信用の出來ない虚偽の宣傳である、實際に於ては露西亞の教會は非常な盛んなものである。さうして又宗教を敵視した露西亞の現在の狀態はどうであるか、あゝいふ共產の制度などといつて、たゝ物質本位のやり方をやつた結果は、國民は全部が乞食みたいなことになつてしまつて、實に酷い有樣のやうである。あゝいふ苦い經驗を嘗め居つたならば、こんど眼の覺めるのもサウ永くはかゝるまい。今までは露西亞は國内の狀態を外國人に見せないやうに蓋をして、さうして虚偽の宣傳ばかりやつて居るけれども、近來は露西亞を交通する人がだん〳〵多くなつて、國内の慘狀がよく傳へられるやうになつて

居る。そんなに遠くまで行かないでも、浦潮まで行つて見ればスグわかる、彼處には乞食が一パイ居る、浦潮グライなら見物に行くにもサウ難かしい事はない、日本の學生なども浦潮視察に遣つて見たら宜い。彼處へ行くと停車場の前でも何處でも、汚ない服裝をした人間がゾロ〳〵一パイ居る、あまり數が多いから乞食といふ譯にもいかない、「臭い人」といふやうな名をつけて居る、或は「家の無い人」とか、「食つたり食はなかつたりする人」といふやうな事で、名前はいろ〳〵面倒なことを言うて居る、それでごまかして居るのだけれども、簡單に言へば乞食の群である。であるから宗教を排斥した結果といふものは、決して人間の幸福になつて居ない。

それであるから最後は宗教が勝利を占めるといふことは、モウ前途明瞭な事である。考へて見れば實に愉快な事柄である、現代の若い人は、この激烈なる無宗教と宗教の大戰闘の一幕を開拓いて進まなければならぬ。それには軟弱な宗教では駄目である。また迷信のやうな宗教では戰闘の時に却つて役に立たない。戰爭の時にはさうである、あの青島を攻めた時でも、英吉利の陸軍か何か弱い軍隊があつて、それを中央に入れて日本軍が兩翼を固めて青島を攻めた、すると獨逸の軍隊がそれを見て居つて、弱さうな英吉利軍の所へ二三發ドン〳〵と大砲を撃ち込む、さうすると其處がワーッと崩れてしまふ爲に、日本軍は攻めるのに非常に困つたといふことである。それは戰爭の事に精しい人に聞いて御覽なさい、本當の戰闘をやる時には、やくざな者は却つて居らぬ方が宜いのである。「枯木も山の賑ひ」ナンといふ時分には、枯木のやうなものでもある方が宜いと思ふけれども、戰爭には弱い奴でも數が澤山居つたら少しは爲になるか……決してそんな事はない、弱い奴が一人居つたら、其奴が尻込をする爲に皆が弱くなる、だからそんな奴は戰闘の血祭りにして皆打斬

つてしまふと言はれて居る。その如くに、今後の宗教の開ひの盛んになるといふ時に、そんなやくざな宗教は却つて足手纏ひである。否、實にそんなものは害毒を世に流すものである、それが爲に無宗教の思想をして勢力あらしむるところの原因を作るものであつて、非常な罪惡である。自分が迷信を人に教へるのみでない、宗教の害毒を唱へて一層惡い無宗教運動の口實を與へる大きな罪を作りつゝあるものである。

そこでどうしても最後は宗教が勝利を占めるに違ひないから、その場合には立派な宗教で行かなければならぬ。それには世界に宗教多しと雖も佛教を指いて他に無いのである。佛教も今までのやうなやり方で、嘘を吐いて居つてはいかん、唯カン〳〵鐘ばかり叩いて居るとか、いゝ加減な事を言うて居つてはいかぬ、信心でも今までのやうな說き方では、過去の傳統的觀念の人間はそれで濟むけれども、今後の人間は承知しない。やはり合理的に、信仰とは斯ういふものである、宗教の意義は斯ういふものである、「サアどうだ」と、こつちから積極的に押出して行かなければいかん。それだけの着眼を以て佛法を擁護しなければ、この思想險惡の時代に處して正しき教を開拓いて行く護法家といふことは出來ない。

五、精進の要義

次に精進であるが、前にも言ふ通り、善い事を選んでこれを行つてゆくのであるから、その善い事といふのを順序立てゝ考へなければならぬ。これがまた佛法は誠によく出來て居る、殊に法華經に於て最も善く現はれて居るのである、法華經に於てはやはり慈悲報恩が一番大事な事になつて居る。これは法華經ばかりではない、「慈悲」といふことは、菩薩行の四無量心といふ場合には、「慈」、「悲」その裏にモウ二つ「喜」「捨」といふものが附いて居るのであつて、擴げて言へば四無量心のことである。それから道德の方で言へば「報恩」といふ事は、これは大薩遮經に詳しく說かれて居ることである。法華經の思想の道德といふものは、やはりこの慈悲と報恩の二つである、慈悲は優しい考を以て物を救けて行かうとする精神である、自分の力を以て他を引立て、他を救ふといふ事が慈悲である、報恩といふ方は自分が恩を受けたり世話になつた方に對して、それに報いて行く、感謝感激の生活が報恩の行となつて行く譯である。人一人には必ずその上の關係と、下の關係があるものである、自分の方から優しくして行く側と、有難いと感謝して行く側とである。慈悲心といふものは、それが子に向へば無論子を育てゝ行く優しい考である、妻に向へば妻を可愛がる考であるが、親に對してもやはり親が可愛いゝといふ優しい考を以て孝養といふものが出來るのである。一方報恩といふけれども、報恩のそこに優しい慈愛の精神が籠つて居る、君に對する忠義も、やはりさういふ慈悲の感じが裏面にはあつて、忠義の道德が行はれて行くのである。それは例へば千代萩の芝居のやうに、御主人が小さい人である場合には尙ほよくわかる、政岡が鶴千代君に對して忠義を盡しながら、毒の入つた物を食べないやうにといふ事に就て心を配る有樣といふものは、非常な優しい考である。その考は大きい所に行つてもやはりその通りである、明治天皇に對して乃木將軍が忠節を盡されるといふ場合でも、やはり陛下は何處までも御安泰で在せられなければならぬ、玉體に萬一の事があつてはならぬといふ事を御心配申上げるところは、やはり優しい親が子供を思ふやうな精神が、忠臣といふものゝ頭腦には輝いて居るのである。その根本の精神は同じことである、それが對手に依つて忠義といひ、孝行といひ、或は慈愛といふやうな言葉で現はされるけれども、優しい考が最も大事な

ことである。であるから佛法を信ずる以上は、第一に人間の心が優しくならなければならぬ、所謂角が折れなければならぬ、女で言へば、角が折れぬ間は佛法の信者にはなれない。

それから又、人から受けた御恩を報ずるといふことに就ても、人から世話になつて有難く思はぬといふ者は無いだらうけれども、兎角それが疎略になつて居る、「エ、有難く思はぬことはありません、それは有難いと思つて居ります、口で言はぬだけです」……さういふ風な態度ではいけない。やはり有難く思つた事を、人の居ない時でもシミ〳〵と身に感ずるやうに、實際にその報恩の行ひに移すまでには多少の暇があるにしても、自分が靜かに坐つて獨り考へたときに「あゝ彼の人にも世話になつたナ」といふ感激の精神が大事だと思ふ。親のことに就てもさうである、親のことを考へてやはり有難いと感激しなければいかん。斯樣にして世の中が慈愛と報恩の精神に依つて結ばれて行く、その裡に國民道德も行はれ、一切の事が行はれて行く譯であります。

さうしてこれを精進といふ以上は、屆せず撓まず貫き通して行かなければならない、一時はやつたけれども途中でやめてしまつたといふことではいかん、力の弱らぬところに精進といふ言葉がある。善い事をしかけても日が經つと氣が拔けるものである、その氣の拔けないところが精進といふことである、即ち弱りかけた時分に又モウ一つ力を加へて行くといふことが精進といふ言葉の意味である。例へば寒行を始めた、初めの間は毎晩元氣よくやつて居つたけれども、モウ二週間も經つとソロ〳〵嫌になつて「どうも寒いナ、今夜は一晩休まうかナ」といふ人が出て來る、その時に「何ッこの位の寒さで凹垂れてなるものか」といつて、初めに考へたやうな元氣を奮ひ起すところが精進行といふのである。だん〳〵に力強く現はして行くといふことを忘れぬやうにしなければならぬ。

日蓮聖人はそれを潮が滿ちて來ることに譬へられて居る、海の水が滿潮に向ふ時には、ザブリ〳〵と寄せては又引いて行く、幾百千遍とも知れず同じ事を繰返して居るやうであるけれども、その間に滿潮の時にはだん〳〵に潮が滿ちて來る、何時とはなしに岸の方まで浪がやつて來る、あの調子が精進行である。これが干潮の時は、同じやうにザブリ〳〵とやつて居るけれども、何時の間にかズーッと引いて行つてしまふ。出來損うて居る信者はチョウド干潮の時の海の水みたやうなもので、例月の講演會にも來たり來なかつたり、その内に到頭來なくなつてしまつたといふことになる、それでは駄目である。又これを月の盈虧にも譬へられて、お月樣が滿月に向つて居る時であれば、十日の月が隱れて十一日の月が出る時分には幾らか大きくなつて來て居る、更に十二日、十三日とだん〳〵大きくなつて、遂に滿月になる、その滿月に向つて居る有樣を精進行といふのである。それが虧ける月の時のやうに、一晩の間に少しづつ小さくなつて、終ひには眞暗になつてしまつたといふやうなのは、これは精進行のチョウド反對で、それを退轉と申すのである。

六、智慧の要義

それから終りに智慧のことに就て、佛法を修行するに就いて心得なければならぬ事柄を簡單に申して置くならば、法華經には第一に人間の本體のことを能く說かれた。人間といふものが只の人間ではない、人間の本質は十界具足といつて、十の性質のものが本質である、今は人間に生れて居るから人間だと思つて居るけれども、さうではない、人間の心は十界といふものを具へて有つて居るのである。今は人間の果報を以ての故に、人間の相が表面に出て居るだけであつて、その心には十のものを皆有つて居

る、人間の心といふけれども、その内には畜生もあれば、餓鬼もあれば、地獄もあれば、天上界もあり、修羅もある、聲聞もあれば緣覺もあり、菩薩もあれば佛もある、この十のもの全體が自己の本質といふものである、人間だけが自己ではない、今は人間の果報を以ての故に、人間が表面に出て居るだけのものである。恰も十枚の着物を持つて居る人が、人間といふ色合の着物を上に着て、九枚の着物を下に着て居るやうな譯である。畜生の相に現はれて居る者も、本質は變らないけれどもやはり畜生といふ着物を上に着て、あとの九枚を下に着て居るのである。表面から見れば違つて居るけれども、その實質から言うたならば十枚の着物を皆着て居るのである。

そこで今度それを着換へる時にどれを着るかといふことが問題になる。それは果報に依つて定まる譯である、自分が勝手に着るやうなものであるけれども、自分の考へ方なり行動が、「餓鬼の着物が好いナ」といふやうなことになつて居るから、パッと着換へたと思づたら今度は餓鬼の着物が表面に出て來て、餓鬼の生活をしなければならぬことになる、「これは大變な事になつたナ」と言ふけれども、それが自業自得といつて、自分がその業を作つてその結果を得るのであるから已むを得ぬ譯である。さう考へて見ると人間といふものは案外バカなものである、自分で一生の間性の惡い事をしたり、罪を作つたり、いろ〳〵やつて、餓鬼や畜生に生れなければならぬやうな事をして置いて、最後になつて「あゝ飛んだ事をした」と言つて後悔する。それは氣の附き方が少し遲い譯である。

そこで考へて見ると佛樣が一番偉いといふことが判る、人間は大勢仲間があるけれども、孰れもお互ひ樣といふやうな譯で、あまり偉くない。大政治家とか、大教育者といふやうなことを言ふけれども、それはホンの仲間内で言うて居ることで、佛樣から

御覽になれば「大」の字は勿體ないといふことになる、皆同じやうな愚劣な考を以て迷つて行き居るのである。これを大きく警められたのが佛樣である。

それで人間の本質はさういふ譯のものであるから、今度これを善い方から考へると、ナニも失望することは無いのである。善を行ひ、德を積むといふことは、金錢にも依らず、學問にも依らない、自分の心懸け一つで出來ることである。又力の足らない者が勉めて善を行ひ德を積むといふことは、僅かの事でも廣大な功德になる、所謂「貧女の一燈」といふやうなわけで、錢の無い女が髮の毛を切つて錢に換へて釋尊のために燈を捧げた、それが長者の萬燈にも勝るといふ事がある、そこが面白い所であり、佛法の有難い所である。僅かな善根と雖も、その人の力に於てその功德といふものを測つて貰へるのであるから、實に有難いと言はなければならぬ。だから優しい考といつたところが、隨分それには階段があるだらう、大きな慈悲仁愛の精神を以つて働く人も、ホンの僅かな親切しか有たない人もあるけれども、それでも親切の心を以つて「佛を信ずるが故に自分は親切の心を養はなければならぬ」と考へたら、どんな罪深きところの鬼婆でも、その懺悔の精神、慈愛の精神のそこには一切の罪障消滅して、その鬼の角の折れたところに救濟の光が現はれるといふことを說くのである。佛樣はそれだけの廣大な力を有つてお在でなされるのである。

そこで人間といふ方からだけ考へると、いろ〳〵の缺陷がある、それは第一有爲轉變の世の中といふことである、どう變化するか判らないのである。女の人に就いて言うたならば、先つ夫婦の關係といふやうな事が大事なことであるから、誰しも良いお婿さんを貰つて、それが理想的の良人であり、永く幸福を享けるといふことを望む譯である。誰も變な面

をした、性の惡い者を亭主にして一生苦勞をしたいといふやうな者は無い、けれどもどうも事志と違ふことが多いのである。誰に聞いて見ても「妾は滿足して居ります」と言ふ人はなか〳〵出て來ない、「言はんで居りますけれども……言へばいろ〳〵の事がございます」といふ譯である、だから缺陷の多き人生であるといふことが判る。ところが幸にして理想的の良人を貰つたとしても、やはりそこに滿つれば虧くるといふ事があつて、あまりに良い男振りであると思つたら早死するとか、或は思慮の足らない爲に人に騙されて「何分人が好いものですから ツイ證文に判を捺しました」……といふやうな事で財産を失くしたり、いろ〳〵の事で苦勞が堪へない、それは實におかしげなものである。人生の苦みの襲ひ來つて居る有樣を見ると、甲乙丙丁、千差萬別ではあるけれども、如何にも人生といふものは嫌な有樣に出來て居るものである。何處の家庭に入つて見ても、甲の家庭に無い事が乙の家庭にある、一方は商賣がうまく行かないで苦しんで居るかと思へば、一方は商賣はうまく行つて居るけれどもその代りに奥さんがヒステリーであるとか、奥さんが確かりして居ると思へば旦那が飲だくれであるとか、旦那がその方の心配がないと思へば、今度は息子の頭腦の調子が少し惡い、どうかして中學だけ卒業させたいと思ふけれどもどうも見込が無いとか、又何にもさういふやうな不足が無いといふ家庭でも、娘の顔に痣があつてどうしても除れないとか、三ツ口といつて唇のところが少し恰好が惡いとか、何かしら思ふやうにならない事がある、實に人生はうるさいものである。

さういふ風に考へると人間の世の中は實に厭はしくなるけれども、併しそこを、人生はさういふものだナといふ事を先に能く觀て置けば、苦勞の絶えないのは自分ばかりではないから、さうクヨ〳〵することはないのである。だから人生は缺陷ありと自覺せよと、釋迦如來が敎へられたことを能く考へなければならぬ。その缺陷に備ふるが爲に自分に確かりした信仰と、モウ一つは、この人間といふ境界が一轉した時に於てはどんなにでも變つて行くのであるから、そのクルリと變り際にまごつかないやうにしなければならぬ。人間の境界でさへこの位澤山の缺陷があるのだから、これが餓鬼へ行くとか、地獄へ行くとか、畜生へ行くとなつたら、どんな苦しい生活であるかわからぬといふことを考へなければならぬのである。

六道流轉の中に於て、人間といふものは先づ一番良い所に居るのである、天上界の方が良いやうに思ふけれども、さうではない、天上界ではあまりに境界が樂に過ぎて善を行ふといふことが出來ない。非常に富裕な、何一つ不自由のないといふやうな家の息子は、大抵馬鹿息子が出來るやうなもので、天上界へ行けばみな馬鹿息子になるにきまつて居る。進んで善を行ふといふやうな考が少しも起らないから、還墮三途といつて、天上界まで行けば、今度は果報が盡きたならば覆かへつて地獄に皆墮ちなければならぬ。だから人間の生活でも、天上界の一つ前に居るやうなあまりに安樂な所に居る者は、皆やり損つて却つて豎獄へ行くやうな者が出來る。天上界はそれのモット大きな本家本元だから、一時は安樂の境界のやうだけれども、終にはストーン〳〵と墮ちてしまふ。人間の世の中でも、現在の境遇に不滿を懷いて、モット樂になるやうに、安樂になるやうにと望むけれども、さうではない、お互ひの境界がチョウド宜しいのである。あまりひどい所で、その日の食ふ物にも困るといふやうな事でもナカ〳〵骨が折れるけれども、お互ひはチョウド良い所に居る、そこで善を行ふといふ氣分も起る譯である。だから人間の境界が一番よろしい、人間でさへ此の位

だから、これが更に惡い境界に墮ち込んだ時には大變だといふことを考へて、そこに信心の心に轉うつて行かなければならぬ。

又一切の事柄を諦めて行かなければならぬ、諦めるといふと語弊があるかも知れんけれども、たゞ仕方がない、どうでも宜いと言つて諦めてしまふといふ意味ではない。人間の世の中の事に就いてよくその實相を明かにして、それに就いて適當な觀念を有つて行かなければいけない。どんな事が出て來てもサウ狼狽へることはない、如何ならん事にも遭へよ、自分の信仰は捨てないと覺悟すれば宜い、この信仰を人生の出來事に依つて捨てたならば、前途の取柄を失つてしまふのであるから、人生の最後は如何樣にもあれ、自分は佛樣の力に縋つてこの信心を遂げれば、間違はない、どのやうな事があつてもこればかりは違ひつこはないといふ釋尊の御敎であり、日蓮聖人の敎であるから、この點に於ては一點も疑を持たない、必ず信心の結果は自分は立派な佛樣に成れる、この成佛得脫の曉に達しさへすれば宜しいのだといふことを考へれば、人間の世の中ばかりがそんなに執着すべき世界ではない。

だから簡單に言へば、人生に對する執着といふものを信仰に依つて薄らぐやうにするのが、佛法の信仰に於ける智慧といふものである。何處までも佛法の信心を得た以上は世の中の事に迷はないやうに、最後に達した時には笑つて人生の終りを完うするやうに、決して狼狽へてはいかぬ、最後は佛樣に成つて行くのである。どうせ人生五十年、過ぎ去つて見れば速いものである、私なども今年の正月になつてから、諸方から通知を受けるのは死んだといふ知らせの方が多い位である、彼も死んだ、誰も死んだ……黑枠附きのやうな手紙が續々と來る。皆人間は或る年齡に達すれば死は免れない。今年の四月には京都の本山で、日蓮聖人の六百五十遠忌を勤修めるわけであるが、この前の六百遠忌の時分に私が京都に居て、十五歲であつたが、やはり法要に列して、導師の前にお經を持つて行くやうな役を勤めた事がある、その當時の事は皆記錄が遺つて居るが、その時に法要に列した坊さんが百人から居るけれども、今日生きて居るのは私と、モウ一人小川といふ人と、二人きりである、あとは皆死んでしまつた、私はその時分にまだ十五といふやうな年齡であつたから生きて居るのである。さういふ譯で人生といふものは、過ぎ去つて見れば、何と言つても死んで行かなければならぬ。そこで信心を決定て、生きて居る間は快活に人生の事を捌いて行くが宜しい、さうして最後臨終に達したならば、サウ身を斬られるやうに思つてギャー〳〵言つて悲しんでも仕方がない。悲しんで延期して呉れと言つたら延期して呉れるならば泣くも宜いけれども、一日は愚か、一分間も延期することは出來るものでない。だからさういふ事に氣を取られるよりも、爽かな精神を以つて臨終をしなければならぬ、さういふ正しい考を確かり決定て置くのが佛法の智慧といふものである。さうして始終やはり說法を聞いて、相當に佛法の敎から來る智慧を磨いて行くといふことが、佛法修行の肝要なる點である。むやみやたらに朝から晩までカチ〳〵言はして居るのが佛法の修行といふ譯ではない、敎を聞くといふ事は、修行の中に於て最も大事な事柄である。

尙ほこの佛法の要行に就いては申し殘した事もありますけれども、あまり長くなりますから今日はこれで。(了)

附記　本講演は日生上人本年正月、地明會でなされた、今から思へば最終の御敎であります

日蓮大聖人六百五十遠忌を迎へて

普く皇國の志士に檄す

文學士　河合陟明

一、佛陀の照鑑と聖者の應生

日蓮聖人の宗教的權威

大覺世尊釋迦牟尼佛が無上最勝の法輪を轉じ給ひて、其の末來徹見の明智光遠く滅後に於ける三時五紀の衆生心理的將又時代社會的變遷を照鑑し、以て弘教の順序時機綱格、傳法の正師四依の導師等具さに之を識し給うてより星霜二千百有餘正しく佛識のさながらに金口の鳳詔に冥應し鷲嶺の告敕に密契して、於如來滅後知佛所說經因緣及次第隨義如實說、神力別付の大導師として大小乘を一貫し權實二教を包籠し本迹二門を融節して、法幢高く佛教統一の法將たる、如日月光明能除諸幽冥斯人行世間能滅衆生闇、末法に於ける人類の一大儀表として、教無量菩薩畢竟住一乘、大涅槃解脫の法統を揭げ、竺漢扶桑三國に亘れる諸々聖賢先覺の豫言に違はず、本化上行菩薩の應生として、衆生濟度の大誓願を行ぜられたる者こそ、實に我が皇國の歷史に出でたる日蓮大聖人その人であつた。

夫れ日蓮大士出誕當時の狀勢たる、國には倍臣北條權を擅にして剩へ承久の亂てふ未曾有の大逆無道暴戾を敢てし、而も一人の起つて之を叱咤膺懲する尊王護國の志士有る無く、教には顯密諸宗禪律淨土、佛法の大義名分を蹂躪して世尊の教系より逸脫し、大恩教主釋尊の大慈大悲を渴仰慶讃するを忘失して、彌陀、大日、藥師等々々の諸佛に拜跪し、恰も日本臣民として他國の君主を奉戴する亂臣賊子と一般、釋迦教の根本義如來一代聖教一貫の大憲を破却する一大僻見に陷り、而も一人の起つて之を叱正痛擊する護法殉教の巨人眞佛子有る無く、却て紊りに經證の明文金口の垂訓を捨閣閣拋して、實に佛教の性格中萬古一貫の大義たる「天に二日無く國に二王無し、一佛境界に二尊の號無し」てふ世尊の嚴訓を放却し、徒らに我見法執の慢憧高く、各其の習ふ處に安んじて纔かに聖教の一義一事に局し、群生皆是れ險隘の邪路に彷徨して未だ佛教一貫の大道に達せず、諸宗亂立宛かも群雄四方に割據し教界亂れて麻の如きの感あり、無闘僧伽の實玆に亡し白法隱沒の讖符に合す。此時に當り一大明師の出でゝ亂麻を斷ち儼然一統を畫するなからんか、佛教永く其利を失して亡びんのみ。蓋し這個の景狀を呈する事は遠く釋尊の聖鑑中に在り、是れ本佛釋尊の夙に法華經宣說の時に在つて、上行菩薩に委するに滅裂せる解釋を再審し汎濫たる意見を統一するの大權節刀を以てし、以て顯本法華の大白法を大日本帝國及び一閻浮提に擴充せん事を嚴命せられたる所以である。

二、豫言の神秘と其の歷史的實現

日蓮聖人の文化史的地位

果せる哉穆々たる神秘の豫言に默契して、超歷史的本地の風光界より歷史的現實のたゞ中へ、薩埵上行は聖日蓮として此の權柄樞機を握つて出でたるのである。見よ其の迫害忍難殉教護法、弘教の方式傳道の態度宣說の教義建立の法門、或は僧俗武斷の壓制暴虐、或は天變地夭飢饉疫病、或は社稷四域の內亂外寇所謂自界叛逆難他國侵逼難等々々皆是れ一とし聖教の金文讖符合せざる無し、　經に云く、「時諸菩薩恭順佛意并欲自滿本願便於佛前作師子吼而發誓言、　世尊、我等於如來滅後周旋往返十方世界能令衆生書寫此經受持讀誦解說其義如法修行正憶念皆是佛之威力唯願世尊在於佗方遙見守護、即時諸菩薩俱同發聲而說偈言、唯願不爲慮　於佛滅度後　恐怖惡世中　我等當廣說　濁劫惡世中　多有諸恐怖　惡鬼入其身　罵詈毀辱我　我等敬信佛　當著忍辱鎧　爲說是經故　忍此諸難事　我不愛身命　但惜無上道　我等於來世　護持佛所囑　諸聚落城邑　其有求法者　我皆到其所　說佛所囑法　我是世尊使　處衆無所

畏　我當善說法　顯佛安穩住　我於世尊前　諸來十方佛　發如是誓言　佛自知我心」「此の菩薩佛勅を蒙りて近く大地の下に在り、正像に未だ出現せず末法にも亦出で來らずんば大妄語の大士なり、三佛の末來記も亦泡沫に同じ、此を以て之を惟ふに、正像に無き大地震大彗星等を出來する、此等は金翅鳥修羅龍神等の動變に非ず、偏へに四大菩薩出現せしむ可き先兆なる歟、天台云く雨の猛きを見て龍の大なるを知り花の盛りなるを見て池の深きを知る、妙樂云く智人は起りを知り蛇は自ら蛇を知る」(觀心本尊鈔)「聖人と申すは委細に三世を知るを聖人と云ふ、儒家の三皇五帝並びに三聖は但現在を知つて過未を知らず、外道は過去八萬未來八萬を知る一分の聖人也、小乘の二乘は云云小乘の菩薩は云云通教の菩薩は云云別教の菩薩は云云法華經の迹門は過去の三千塵點劫を演說す一代超過是なり、本門は五百塵點劫過去遠々劫をも之を演說し又未來無數劫の事をも宣傳す、之に依て之を案ずるに委く過未を知るは聖人の本なり。教主釋尊は既に近くは去つて後三月の涅槃之を知らしめす、遠くは後五百歲の廣宣流布疑ひ無き者歟。若し爾れば近きを以て遠きを惟ひ現を以て當を知らん如是相乃至本末究竟等是也。後五百歲には誰人を以て法華經の行者と之を知る可きや、予は未だ我が智慧を信ぜず、然りと雖も自他の叛逆侵逼あり、之を以て我が智を信ず、敢て他人の爲めに非ず、又我が弟子等之を存知せよ、日蓮は是れ法華經の行者也、不輕の跡を紹繼する故に、所謂正嘉の大地震文永の長星は誰が故ぞ、日蓮は一閻浮提第一の聖人也、我が弟子仰いで之を見よ」(聖人知三世事)

天台大師云く、「後の五百歲遠く妙道に沾はむ」

妙樂の記に云く、「末法の初冥利無きに非ず」

傳教大師の云く、「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに在り、代を語れば像の終末の初、地を尋ぬれば唐の東羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生鬪諍の時なり」

彌勒菩薩の瑜伽論に云く、「東方に小國あり其の中唯だ大乘の種姓のみ有り」

「謹んで肇公の法華翻經の記を案ずるに、云く、大師須梨耶蘇摩左の手に法華經を持し右の手に鳩摩羅什の頂を摩でゝ授與して曰く、佛日西に入つて遺耀將に東に及ばんとす、此の經典は緣東北に有り汝慎んで傳弘せよと云云、予此の記文を拜見して兩眼灑の如く一身悅びを徧くす、此の經典緣東北に有りとは、西天月氏國は未申の方日本國は丑寅の方なり天竺に於て東北に緣有りとは豈日本國に非ずや、遵式の筆に云く、始め西より傳ふ猶月の生ずるが如く、今復東より返る猶日の昇るが如し云云、正像二千年には西より東に流る、暮月の西空より始むるが如し、末法五百年には東より西に入る、朝日の東天より出づるに似たり」(曾谷抄)「法華經の第五卷勸持品の二十行の偈は日蓮だにも此國に生れずば殆ど世尊は大妄語の人日蓮なくば此一偈の未來記妄語となりぬべし」(開目鈔)「我が言は大慢に似たれども佛記を扶け如來の實語を顯さんが爲めなり、然りと雖も日本國に日蓮を除き去つて誰人を取り出して法華經の行者とせん、汝日蓮を謗ぜんが爲めに佛記を虛妄にす、豈大惡人に非ずや、日は東より出でゝ西を照す佛法も亦以て是の如し、正像には西より東に向ひ末法には東より西に往く、法華經の第八に云く、於如來滅後閻浮提內廣令流布使不斷絕等云云問うて曰く、佛記既に是の如し、汝が未來記は如何、答へて曰く、佛記に順じて之を勘ふるに既に後五百歲の始に相當れり、佛法必ず東土の日本より出づ可き也」(顯佛未來記)と。

一讀以て聖人の偉勳を知る可きである。叙し來つて此に至らば、釋尊の讖言と聖人の芳躅と相須つて佛教史をして整然たらしむ。嗚呼神聖なる哉　佛教の歷史

三、皇猷實現の瑞兆

佛教復活の先序

抑も教機時國序の宗教五綱、即ち教義の淺深衆生の心情時代の變遷國家の體性及び教法流布の進化發展的序の此の五義を審案して、宗教哲學的心理學的社會學的民族學的將又宗教進化學的歷史哲學的洞觀の周匝整備せる考察を遂げ、據て以て法を弘むるは是れ教家の使命にして、又實に經證の明文に基きて夙に日蓮大士の唱道せられたる所である。而も繙つて思へ大士以後慘風悲霜血涙の痕、日蓮主義史即殉

教史、法難忍難の幾百載、政權武門に在つて王法佛法の大義名分法國冥合の大教義は只徒らに空しかりしも、見よ今ぞ迎ふる今年六百五十の春、時正に中す、天地は太默の間に即ち教ふる乎「佛眼を藉つて時機を稽へ佛日を用つて國土を照せ」曩に大正の御宇十一年今上攝政の御時、聖應本多日生師等畏宗僧俗の奏請と相俟つて、朝廷親しくそのかみの壯烈なりし護法護國の赤誠活動を鑑み給ひて、「立正大師」の諡號は我が知法思國の大先覺者日蓮聖人に追賜せられ、進んで昭和戊辰、正に明治維新より周甲の歳、今上登極の大禮に當りて、教化を醇厚にす可きの勅を宣らせ給ふに至り、玆に國家的一大懺悔と一大自覺は漸くに促され來らむとし、剩へ又此の佳節に當りて、聖應日生師等皇猷祖道の精髄を體して風雨多年社會教化の事に盡瘁せられ來りし法勳高き諸先覺に對して、紫雲の上より天杯を恩賜し給ふの一大美事有り、嗚呼皇國の大謨其の本に復して漸く祖猷實現の兆ならむとする歟。況んや此の事たる是れ多年聖應生師の提唱し道破し警破覺醒され來り居る所なるをや。眼を轉じて睥睨一番すれば、今や世界を擧げて思想學見滔々として澗濁し、群生の迷執轉深うして强ちに異邦の劣邪想に走り、破法破國の因緣內外交々迫る、而も翻つて思ふに這個凶兆是れ然乍ら大法光顯の吉瑞なる乎　佛教復活の先序なる乎　見よ今地上西東を擧げて物情日に非に險惡にして諸國民族皆色を失へるの時、萬古之を匡救して起つ者は、獨り大聖釋尊の明教經王法華の佛道聖者日蓮の妙法夫れ是れなる乎　夫れ唯是れなる乎

四、皇國一貫の大謨

輪王統治の大理想

神儒佛三道を貫串し、其の從淺至深の綱格を明かにして之を體系的に發揮し、乃ち東洋文明の權威を斷じて之を治國經綸の大本と立せられたるは、推古の御宇聖德以來皇國の皇猷である。爾來歷代の朝廷此の大謨に則らせ給ひ、世々の賢哲皆之を体して家國の風教を立し來れるもの、就中聖德桓武傳教日蓮等正に其の好範と稱す可きであらう。德川の中世幕末維新の世、時人甚だ之を謬りしも、今や朝廷親しく新たに國是の大本に省み給ふの端緒萌し、隱約の間に此の祖宗烈聖の遺猷を宣らせ給ふに至る。昔は百世の達人聖德太子自ら法華經を講じて鎭護國家の妙典と定め、佛法は神史の玄幽を說くと斷じて我國體の深遠微密の哲想を明かにし給ふ。寔に天祖無窮の神勅、神武建國の大詔、歷世一貫の垂統經綸、億兆一心の醇風美習、是れ神洲の精華にして、而も此の事實其の深義淵旨なる所のものは、佛法就中法華本迹の義門に維れ賴らずんば非る所である。所謂佛界緣起、轉輪聖王の大理想、法國冥合の大關節は即ち是れ乎。嗚！何者の愚ぞ、我が光輝ある皇國の傳燈的文化を放却して、卒然異邦の新思潮否寧ろ邪想劣想に直ちに屈從盲動せむとはする！　若し夫れ明哲の明智宜しく巨眼徹視以て我國古今の文化を通觀せば、是れ宇內人文の寶庫にして、又以て須く之を愛護せずんば非る處である。今我國固有の精神文化たる神儒佛三道乃至は東西文化の合流せるたゝ中に在つて、然も其の最高峯最深底玄遠雄大無外なる所のものは、即ち是れ如來大覺釋尊の明教炳として日月の如し。夫れ至理は太古にして太新なり、內は佛法を統一して之を社稷に体し、以て王法佛法を冥合せしめ、外は西東古今の諸々思想文明を開顯して世出一貫諸乘一佛乘に來らしむるは、是ぞ正しく世尊の垂訓佛法の心髓たり古賢の明斷先哲の義判たり、前者は即ち「正法を以て國王に付屬す」と云ひ、「道力を以て勢力に合せしむ」と云ひ、或は仁王護國と云ひ守護國界主と云ひ、或は內護外護と云ひ護法護國と云ひ、將又之を輪王統治の大理想と云ふ。後者は即ち開三顯一と云ひ唯此一事實と云ひ、或は本說法妙と云ひ法界三段と云ふ。之れ實相の最深秘處、之れ法界の最極妙處たり。所謂第一義諦と三悉檀と、萬世不磨の體道と隨時隨應の用道と、然り苟くも教化の大事を論ぜんには、時空を一貫して不朽の權威を有する恒久の教化と、時處位に適應して謬らざる當面の教化と、二面を併せ備へて始めて能く尊嚴と効果とを全うし得るのである。我皇國の歷史的精神文化、皆這般の妙致を道破せざるは無く、即ち惟神の大道に於ては、肇國宏遠樹德深厚之を古今に通じて謬らず之を中外に施して悖らずと示し、儒教聖賢の學に於ては、先王の道を行つて謬つ者は未だ之有らざる也と教へ、佛教に於ては、五佛同道三世

常住と說いて權實の二智本迹の教觀を論ずる所以のもの、皆是れ具眼達識の士の當に着目せずんば非る所であらう。就中佛法に於ては弘教の網格善巧の惑智常住の妙化深幽の活理、周匝完備して復餘蘊無く、普く一切世間の境界に至る沛然たる利潤靡然たる風化、縱橫潤達時代又社會に適處して活潑々たる濟世利民の大佛事を爲すは、固是れ佛教の大教義たり活作用たり將又如海如虛空の標度たるのである。嗚呼卓然たる哉如來大覺の教敕、嗚呼炳乎たる哉經王法華の鳳詔、是れ久遠本法の眞際、是れ圓浮一實の名教、實にや人文永遠の大光明たり、巍然たる哉や

五、佛教の開顯包容統一性

世界人文の過去及び將來を論ず

抑も佛教々化の活力は、由來三寶に歸依する具足の信より出づるのであるが、其の三寶の中の中心は即ち本佛釋尊にして、是れ感應の源泉救護の中心、法界本有常住の大靈格者、無始實在の慈悲的大人格、絕對的尊嚴の聖位に立ち給ひて、我等信行唯一の依止處歸敬處を正に茲に定む可きもの、而て此の三寶具足の對象をば、三國二千年に亘れる佛教々理發展の史上に於て、我が本化上行日蓮大聖人は、理證的教理的にも歷史的文化史的にも將又實に聖教量文證の根礎よりしても、深く經旨佛意に契會して、茲に三義普く圓かなる一大建設せられたる無上最尊の勝妙法門として、構成的積極的統一神教の本尊として顯示せられ、而て其の意義を審かに圓かに說き教へられたるのである。幾多の佛陀諸天善神等ありて殆ど散漫の如くに思はるゝ佛教の教義も、吾が日蓮聖人の教より見來る時は、悉く本佛の應現として茲に統一を認めらるゝのであつて、此の統一的の本佛と其の無邊の應現とを纏めて即ち一個の體用不二の佛陀と信じ奉る時は、是の教義是の信仰は極めて大なる包容力となり同化力となり又顯應作用を起すのである。元來佛教は此の統一的本佛觀の立脚地に立てる宗教であつて、諸神界の統一を宣明したるものである。啻に佛教は其の內包的立體的絕對的方向第三次元的方向に於て然るのみならず、又更に人文歷史を包攝する其の平面的外延的方向に於ても、鮮かに斯の活作用を示し來れるもの、即ち先づ印度に在りては、波羅門教徒の信仰對象として崇拜せりし梵天帝釋等の諸神を包容し同化せしめ、又順應的の教義を示して護法の善神と稱し、佛陀は此等諸神を攝化して天中天の寶座に立ち給ひ、進んで此等諸神の小なる推護は、佛陀妙用中の一支流であつて大慈悲海中の一滴水に外ならぬと教へて、還元統一の旨致を明し給ひ、又支那に入り來つては聖賢の教訓をば包容し同化せしめて之に順應の教義を示し、孔孟等の諸子も佛陀慈化中の妙用に外ならずして、其の人道倫理の教訓は佛陀大教の前方便に屬すと爲し、茲に「禮樂前馳眞道後啓」てふ歷史哲學的洞察を示し、進んで我日本に入るに及んでは、建國の祖として崇拜せる幾多の神明を崇敬して能く之を包容し同化し、順應的の教義を發展して本地垂迹の說となり、斯くて幾多の小なる信仰を陶冶して、之を統一的本佛と統一的信仰の下に融合せしめたのである。此の佛教の包容力と同化力と順應作用とを有する事、及び三國三千年に經來れる彗かなる史實とに徵するならば、他日西歐の天地に我佛教の傳播せられて彼の哲學及び耶蘇教との接觸を試むるの日は、又此の活力を打開して、彼等の思索信仰と其の對象とを包容し同化せしめ、又內よりは順應的作用を起して、茲に我統一的本佛の妙用中に統攝せられ終る事も、敢て推知し難き事では無いであらう。歷史は鑑みなり、所謂故きを溫ねて新しきを知れ、否今や既に西歐諸國民族の間に、駸々として我佛教は喜び迎へられつゝあるには非ずや。彼の哲學者は或は主知主義に流れて而も懷疑に走り、或は惡戰苦鬪思索の果て、漸く眞實在の全象を把握するに至らむとして而も未だ化城に踟躕彷徨せる者、又彼の耶蘇教徒は「先づ信せよ」信仰の前には柔順なれ憍慢を去れと口々に言ひ居るも、單に情緖の上に建つる信仰は人類思想の發展に伴うて決して最後の優勝なる歸着を占むる事能はざるであらう。今日の處知力の恃み難き點あるより、其の一面に突入し來りて情緖の信仰を唱ふる傾向の見ゆるも、是亦一時の現象のみにして、吾人々類の性情は常に合理的たらんと欲求し又滿足を得んと欲求す。合理的たらんとすれば滿足を得ず、滿足を得んとすれば合理的なる能はずとは、之

れ彼等信仰の聲なり將又彼等思惟の聲なるも、之れ人類半面の欲求を捨てゝ半面の欲求に安んぜんとするものであつて、決して全欲求を充足せしむるに足らざるのである。されば必ずや全人類の全欲求を滿たし果つ可く、更に新たなる一段の勇を鼓して世界人文思想界の大發展を賚し來るの日有る可く、其の時は我が佛敎の信智合一の大信仰に對して拜跪し來る可きは、敢て智者を俟つて後始めて漸く知るべきの事には非るなりと信ず。嗚呼　大聖釋尊の明敎燦として人文の悠遠を照す……

六、徵古鑑今推今辨古

祖國史上に於ける隱約の照應

神洲の歷史三千年、我が皇國日本のうるはし名が、始めて世界に知られしは、諸子よ知れ！　我が祖國史上の鎌倉時代、國士日蓮の鎌倉時代、正に此時我が東瀛の仙洲は始めて世界に知られたのであつた。

かの西歐の十三世紀、エルサレム聖地回復の熱烈なる宗敎的希望を以て、十字軍の戰士が武士道の精華とローマ法皇の權威とを翳して、遙かに東コンスタンチノーブルの海を越えて亞細亞の地に入り來りしもの一度二度三度四度前後七回二百餘年、宛かも其の時に當りて、世界史的一大風雲の催す所東亞の天地にてば、かの漠北オノン河畔に起りし鐵木眞が成吉思可汗の號を唱へて曙に四隣を經略し、東亞の一角より淺く西方歐羅巴の地に侵入して大元蒙古の名を轟かしめ、忽必烈の時に至つてはユーラシア大陸の殆ど大部に跨る尤大なる版圖を形成して勢威世界を席卷し、更に餘威を藉つて遙かに日東我神洲の聖國に迫らんとはしたる、嗚呼國危し！　聞け皇國の歷史三千年其の金甌無缺の國體を以てして然も龍虎の爪牙に呑噬せられんとせしもの實に此時を以て最なりとなす乎、果然聖敎の金文には、破法の國土を破らむとすと他國侵逼難備さに識あり、あゝ祖國の命運危機に迫る！　見よ然も正に此時に當り宛も國士日蓮が、夙に之を豫言し警破し覺醒して大聲叱呼「正法治國」「立正安國」「知法思國」の大義を叫びし護法護國の大誓願大活動　あゝ一片耿々の赤誠義憤　悲壯凜烈毅然として祖國敎法の危機を救はんとぞ起ちたりし是れ此の史實元寇は、宛かも當時忽必烈に仕えし伊太利人マルコ・ポーロが、歸來「東方見聞錄」を著して、書中、大元蒙古が我が神洲の聖國を威伏侵略せむとして大敗せしの事實を、記載したる所よりして、「ジパング」日本――我祖國の名は、此に始めて歐洲諸國民族に知られたのであつた。

皇紀二千五百二十八年、尊王攘夷佐幕開國の紛々擾々たる風雲は、遂に「明治維新」「王政復古」――回天の大業と成つて現れ、淺く神武建國の創業を嗣いで尊王開國の國是は玆に確立したのである。夫れ幕末維新尊王愛國の史實を論ずる者、若し其の勤王思想の發祥を尋ぬるならば、何人も先づ指を水戸義公源光圀に屈するであらう。然り光圀の創めたりし大日本史の眞精神こそ、實に我國近世に於ける尊王思想の一大源泉を爲したるものであつた。抑も此の光圀の此の尊王の大精神を培養薫陶したりし者は果して何者であつたか。かの我が宗敎史上壯烈淋漓たる慶長十四年二月二十日京師六條磧に於ける殉敎護法の雄傑日經上人師弟六人の耳劓ぎの刑罰の當時、此の德川武斷の壓制の主老獪家康の室たりし養珠夫人並びに其の子靖定夫人其の人々の、祖母たり母たる此の熱烈なる日蓮大聖人の信仰に育てられたりし子光圀は、玆に深く國士聖日蓮大士の靈格に感孚するに至り、此の日蓮大士の大義大忠と、かの伯夷叔齊の高風清節とは、光圀をして身は幕府の近親に在り乍ら、然も忌憚無く尊王の大義を唱へ君臣の名分を明かにせしめたのであつた。嗚呼義公水戸光圀、幼時より佛祖の靈龕に浴して、宗門寺檀幾多の經營に親しく法華經王の外護に盡しつゝ、「夙に皇道の隱晦を慨き深く武門の驕盈を恐れ名分を明かにして志を筆削に托し正邪を辨じて意を勤懲に致せり洵に勤王の倡首にして實に復古の指南たり」（明治天皇贈位の勅）　聞く義公「大日本史」を編纂するに當り、命名は「皇朝史」或は「私考」等の存意なりしも、會々久昌寺なる母の菩提處に於て、往昔日蓮大士が弘安四年夏六月元軍海を壓して將に迫り來つゝある時、門弟に嚴誡せられたる一文に、「小蒙古人、大日本國に來るの事」と書き留めありし其の甚深の聖意に感激して、釋然乃ち「大日本史」と自署せりと稱ふ。嗚呼日蓮大聖人と偉人光圀と、如何に靈的感孚冥應の深かりしよ――思へ、歷史的運命の轉變又奇なる哉

——されば明治回天の大業には、實にもそのかみ逆臣北條幕府に侃々諤々の絶叫以て王法佛法の大義名分を唱道したりし其の日蓮大聖人の大主張大活動が、遠く其の由來する所と爲れりしものなる事を今や明かに知る事が出來るであらう。嗚呼世界の舞臺に始めて出でたる我が維新開國明治の時代は、見よ！ ジパング日本——鎌倉時代、聖者日蓮豫言者日蓮「久しく大忠を懷いて未だ微望を達せざりし」國士日蓮の鎌倉時代に直接する！

七、佛法の維新

法國冥合より東西文化の融合に進まん

明治維新王政復古は、治道に於ける大憲として我皇國日本文明の根本的形式である。今や我等は其の必須の內容として覺道に於ける根本的精神文化を洞察大觀し寄與し貢獻せねばならぬ。知れ王政維新國體擁護は、即ち聖哲日蓮が夙に唱へたりし尊王の大義護國の經綸の、遙かなる史的實現の結晶であり、又實に其の魂魄たる王佛冥合法國一如の先驅として必ず先づ實現せられざる可からざる所であつた。然乍ら吾人は之を以て我が帝國の使命の治道王法に於ける形式的統一として、更に其の內容的統一を、然り其の眞の精神魂魄を大成し擁立せねばならぬ。其の內容とは何ぞ其の實質とは何ぞ、東西文化融合の一大統一的文明即ち是れ！ 其の中心とは何ぞ其の主權とは何ぞ、佛法の經王法華顯本の教觀が儼として此に君臨する。是れ我が皇國日本の獨創的文化なり、開顯包容統一的一大文明なり。見よ先覺日蓮夙に其の教觀を本邦に唱へて高く法幢を擁立したりしが、今や維新開國の時序に則り、澎湃として押寄する西東諸思想の接觸せる現時に當つて、渾圓球上世界の縮圖なる我國は、其の偉大悠久なる獨創開顯の統一的文明を、「我滅度後後五百歲中廣宣流布於閻浮提無令斷絕」の佛讖に違はず、當に世界的世界史的發揚の機運を賛し來らねばならぬ。王政復古は先序なりき、信教自由は道程なり、次いで將に來る可き來らしむ可きものは「佛法の維新」！ ならざるべからず、我等の使命は雄大なり我等の天職は崇高なり、然り我等は明治王政の維新に次いで、必ずや將來當に應に——佛法の維新——を實現せしめずんば止まず、——佛法の維新、經王法華の君臨、王佛冥合、戒壇建立、閻浮廣布、宇內人文の統一、見よ顯本教觀の法幢高く太虛に翻らん、知る是れ天民の先覺者たる我等が祖國の使命たる也、天孫降臨の蒼生たる我神洲大和民族の使命也。嗚呼皇國の天祖と佛法の威靈と、然り我等が祖國と法華經と、先天的にも後天的にも國體的にも歷史的にも、誰か血脈因緣無しと言ふものぞ、見よ卿等の祖國に聖日蓮は出でたり、今や聖滅第六百五十年、聞け祖道復古の警鐘は轟き渡れるを！

「大陣既に破れたり餘黨は物の數ならず、日蓮魁したり若黨共二陣三陣つゞいて迦葉阿難にも勝れ天台傳教にも超へよかし」と、又云ふ「一人も無く攻め落して法王の家人と爲すべし」と、聞け！「日は東より出でゝ西を照す、佛法必ず東土の日本より出づべき也。……我れ日本の柱とならん我れ日本の眼目とならん我れ日本の大船とならん」と。嗚呼大聖人門下の志士よ、今千載一遇の好機に當りて此の大聖人の志願を光顯せずば、夫れ復何れの時をか期すべき！ かの明治回天の時代に際しては、我が日蓮門下は殆ど眠り居たりき、卿等今亦再び其の轍を踐まむとするか！ 覺めよ起て！時は來れり——時は來れり、見よや王佛一乘の大雄圖 法國冥合の大理想 醍醐一實天晴地明日東照西四海歸妙 あゝ何れの日ぞそも何人の使命ぞ、起て！法王の佛子本化の師子兒、起つて法統愛護の大義に殉へよ 起つて祖道復古の大義を唱へよ 起つて佛法維新の先驅者たれ 起て！皇國の志士祖國の民、起つて人類救濟の爲めに戰へ 起つて普く濟世利民の爲めに戰へ 起つて偉大なる文化是正の爲めに戰へ 起つて文化の根本理想を確立しそが東西融合の爲めに戰へ 決して卒然異邦の新思潮に屈從すべからず 起て！全日本の青年士女、起つて宗教的高潔の理想を以て戰へ 起つて我國古今の文化を通觀し此の光輝ある無上の寶庫を愛護せよ 起て！卿等！ 起つて睿智を修得し來つて文化建設の大業を完成せよ

八、無上の信仰と無窮の榮光

汝が永遠の使命を自覺して起て！

『弟子一佛の子と生れて諸經の王に事ふ何ぞ佛法

の衰微を見て心情の哀惜を起さゝらんや』法華經の行者日蓮――日蓮は曾に經證理證なるのみならず、實に本佛無始實在を現證するを以て自ら任ぜり「現在眼前に證據あらんずる人の是の經を說かば信ずる事もありやせん」果然――

本佛釋尊は久成の愛兒たる上行菩薩をして龍口の斷頭場に坐せしめ血と涙とを以て吾曹聾聵の鼓膜を洗ひ最も鮮かに劉曉たる妙音もて我死せざる由を聞かしめ給ふ南無妙法蓮華經――見よ佛祖の照鑑頭上に在り「本佛我れに在しませり！」我等も亦正に是れ一分の如來使なり、やよ法華經の行者日蓮の法統を繼ぐ者、汝！道念なくば生死を離るべからず、知れや一心欲見佛の念願不自惜身命の淨行　身輕法重死身弘法　菩提の成證懸つて瑪に在り！やよ無上の信仰と無窮の榮光！起て！法王の佛子本化の師子兒

起つて法統愛護の大使命を果せ　起つて濟世度生の大願を行ぜよ　起て！起つて謗法謗國を嚴誡し根治し以て法國最勝の大恩を報せよ　見よ今破法破國の因緣愼さに皇國を蝕む、咄！斷常の二見　闘諍盛なる――食毒の徒輩類に蠢動し三災七難殆ど並び至つて宛も國士日蓮の時代に酷似するか　起て！皇國の志士祖國の民、起つて護法護國の爲めに戰へ　起て！起つて膺懲の劍侵略の鋒を振へ　「コーラン乎劍乎」は猶甚だ緩弱なり、須く「法華經は劍なり」と言へ、老媼も杖を揮つて世界統一を說け、幼童も鼓を鳴らして法王進軍の曲を吹奏せよ、死せる萬人を有するよりも生ける一人あるに如かず、況んや本化の師子兒青々たる多士一度び異體同心の祖訓を體して厭然起たば、舉國警呼應同して尊王護法の大節を復し、一擧して侵略突貫の聲を靑しうせば山岳震ひ湖海動くの慨無くんばあらじ　侵略なる哉　侵略なる哉　夫れ法國冥合戒壇建立の曉は當に更に進んで宇內統一に進軍せよ、領土の侵略に非ず文化の侵略なり、領土的一個の帝國を建設せんとに非ず、普き人類救濟の爲めの文化の統一なり、我が無窮なる皇國をして世界萬國に君臨せしめよ、是れ神洲の榮光なり是れ轉輪聖王の大理想なり、思へ經王法華の妙道は、我が皇國永遠の然り萬邦一貫の神髓なるを。知れや諸乘一佛乘の一大開顯統一は是れ聖祖宣傳の根本主義なり、世尊與世の大佛事なり、佛敎々門の生命なり、國家は此の大主義を得て始めて眞乎たる基礎の上に立ち、社會は此の大主義を得て始めて光輝ある文明を來らし、人類は此の大主義を得て始めて人生々活の根本意義を領し得可くして、是れ眞に國家の無上の光榮なり將人類の最大の幸福なりとす　然り實にも此の無上最尊の妙敎に依れる決定の道念と信仰とは　永しなへに我等の心靈を開拓し　其の本體の正知見を悟り得て　上下貴賤ともに世間の樂を享受し　後に正眞に契うて　涅槃不死の境界に逍遙せむ

四非常の偈に云く

劫燒終訖　乾坤洞然　須彌巨海　都爲灰揚　天龍福盡　於中彫喪　二儀尙殞　國有何常

妙法蓮華經に云く

大火所燒時　我此土安穩

この兩文を拜せよ　心あらん人誰か法華の妙旨に拜跪して　其の顯本統一の道法を慶讃せざるべき生老病死輪轉際り無し　栴檀林に薇蘭を採り　寶山に瓦礫を捨ふ勿れ　覺めよ！もろ人　起て！皇國の志士

人打ちはり憎むとも　法重ければ必ず弘まるべし　と、

嗚呼旺なる哉　我が經王統一軍の正令　凛として聲あり　赫として光あり　奮起せよ　健闘せよ　我軍の戰士　淳善の佛子

嗚呼　無上の信仰と無窮の榮光

曙の兒等よ　海原の兒等よ　花と焰の國力と美との國の兒等よ　聽け涯し無き海の諸々の波が　日出づる國の島々を讃むる譽れの歌を

我等が國に　七つの譽れと　七つの大業あり

然らば聞け　其の七つの譽れと　七つの使命を

一、獨り自由を失はざりし　亞細亞唯一の民よ

我等こそ自由を亞細亞に與ふべきものなれ

二、曾て他國に隷屬せざりし　世界唯一の民よ

一切の世の隷屬の民の爲めに起つは　我等が使命なり

三、曾て滅びざりし　世界唯一の民よ　一切の人類幸福の敵を亡ぼすは　我等が使命なり

四、新らしき科學と舊き智慧と　歐羅巴の思想と亞細亞の思想とを　自己の衷心に把握せる　世

界唯一の民よ　此等二つの　やがては世界に來るべき一大統一文明を建設するは　我等が使命なり

五、尊嚴比ひ無き宗教を有てる　世界唯一の民よ　一切の神々を統一して　更に神聖なる眞理を發揮するは　我等が使命なり

六、建國以來一系の天皇　永久に亘る一人の天皇を奉戴せる　世界唯一の民よ　我等は地上の萬國に向つて　人は皆一天の子にして　夫れを永久の君とする一個の帝國を　建設すべき事を敎へんが爲めに生れたり

七、萬國に優りて統一ある　世界唯一の民よ　我等は來るべき一切の統一に貢獻せんが爲めに生れ　又我等は戰士なれば　人類の平和を促さんが爲めに生れたり

曙の兒等よ　海原の兒等よ　斯くの如きは　花と焰の國力と美との國なる我等が　七つの譽れと七つの大業なりと謂はん

河合陟明著

日蓮聖人の人格と主張

定價　金拾錢　郵稅　金二錢

こゝ九月二十五日彼岸會のころ　恩師本多日生先生の病み給へるに由りて、不肖未熟ながら師命に依り大阪にしてラヂオ放送致せしの際、恩師より賜ひし草稿に其後加筆增補してこのたび大聖人六百五十遠忌の意義も深かる時をぞ得て同好の士に頒つ事とはなりぬ。あはれ斯くとは夢圖らざりしよ　師の君聖廳院日生上人にはかに今年三月十六日遷焉として　あゝ我が慕はしき此の師の君みまかり給はんとは　せめて之をお目の尙すこやかにおはしませる間に　にかけ度かりしものをこそ　さあれ今は我も亦歎かじ　我には此の人界唯一の正法正義の正師たりし我が師の君は　今はしも世尊のみ許靈山淨土にして永しなへに亡ぶる事なき妙のみ姿もて慈眼溫かにほゝ笑みながら　我が爲すわざをいとゝみそなはし居給ふらむ　さては此のさゝやけきふみも　先と今と更に變りもあらぬ師の君のみ前に捧げて　且はいさゝか世の人の　まこと尋ぬる求道の靈に裨補する事もなむと　はぢらひの心をおさへつゝ之をおくる

申込所　東京府下南品川四一二妙國寺內　統一發行所

振替東京五一〇七一番

本多日生上人御病床略誌

今年の正月二十四日は日生猊下　統一閣の地明會に御出まし遊ばされ『佛法の要行』と題していつもの樣に御慈敎を與へられ夕景に自動車で自分共お伴して品川へ御歸りになつた、これが最終の御講演にならうとは誰も知らぬ。

其數日後の廿八日順道會が銀座の米田屋に開催されたけれ共寒さの爲めに御用心なされて山口師と自分に代講をお命じになつた。翌廿九日には時友氏と協賛會の進捗に就て懇談をなすべく特に自ら御親書をお認めになつた程て、床の上には居られこそすれ別にこゝぞといふ程のお障りもなく濕布と吸入を唯一の療法とされて居た。それは翌卅日午後五時妙國寺に於ける協賛會の役員會にも御着席遊ばして將來に對する御畫策に斷案を與へられたり等して八時頃一同の散會したあとでも二三の御注意を下さつたことに徵しても知られる。

三十一日は統一閣協賛會本部建設の候補地として選ばれたある屋敷の寫眞を撮つて之をさる信頼すべき人に見せて說得せしめようとの思召を体して自分は仰に從つて迅速に取運んだから大層御滿足の御樣子に拜された。

二月一日は統一閣の日曜講演日で行かうかとのお氣持も見へたが曇天でもあり後に雨となつた程天候もよくないから御用心遊ばすやうにとの事で御中止になつた程お元氣で在らせられた。其後數日の間に於ても絕へず統一閣協賛會の事を懸念遊ばされ先づ場所の選定が第一だと仰せられ御指命に依つて二三の人達とも折衝したり一方には勸募に關して夫々御指定の通りに活動する位に協賛會の事業には甚大の御期待を以ておのぞみになつて居た、而して人は何等本會の仕事は運んでないと思つて居るだろうが事實は心配ありません日一日と好都合に向つて居るではありませんかとお話しになつて喜んでゐらした。

十日、御豫想の一端が曙光見へた爲めに更にある有力者と打合せしたいから先方の御都合を聞いて來るやうにといとも御滿足に御機嫌お宜しく拜された。十六日は統一閣に於ける地明會で、昨日は久し振りの好晴であり從つてお氣分も宜しく今日は皆が待つて居るだろうから出講しようかと仰せられて居たが生憎の雨で薄ら寒くなつて來た爲めに今風邪にでも襲はれてはならぬから會員には心配せぬやうに申傳へて代講せよとのことに何等の不安どころか却て其の方が結構だと思つて自分は統一閣に向つた途中一個所重要任務を果して。

十七日山田博士夫人が昨日地明會に猊下の御出講なかつた事を懸念遊され態々お見舞ひ下さつた、夫人は醫師の注意で面會謝絶であるのに暫時でもお目に懸つてお疲勞遊ばしはせぬでしようか、しばらくお目に懸らないためか大層おやつれ遊ばして居らるゝでありませんか醫師は別に心配さるゝやうな御病狀ではない猊下は湘南地方の暖い處に三月一杯靜養に出ようと仰せられて居るからそれもお宜しいでしようと申されたそうですが何だか私は不安ですね、誰か他の診斷をおうけ遊ばしては？乞度何處にか病源は隱れて居るのではありますまいか、どうか充分御注意下さいと大層御心配氣にお歸りになつた。常侍の者はそれ程氣付かぬやうでも時たまに遇ふ人はどうも御衰弱遊ばして居ると直感される。

十九日新谷主治醫に猊下の咳と尿と便の檢査を願ひ御容態を委しくお尋ねした、若し先生に少しでも御懸念の點があれば根本的に御研究願ひたい、それが爲めには一週間でも十日でも入院して頂いてお調べ下さつて宜しいと迄醫師に申込みましたけれ共其の必要はありません今分は猊下の御病名は肺氣腫と申して永い間の御講演で肺が約二寸ばかりも擴大しそして宛かも海綿の水を充分吸收せざるやうに內部が若干衰へて居るために立派に肺の働きが出來かねる處に病源はあります、併し追々良い方に向つてゐますし心臟の方も大によろしい胃腸にも故障はありません、御安心あつて然るべしとの事で其翌日咳や便の檢査の結果何等の異狀も認めないとの報に接しました、猊下に於かせられても、それ見たかお前達は大騒するが自分は大丈夫である、健康な者を大病人扱にするのは寧ろ罪惡ぢやないかと戯談を仰せられた程であつた。併し私共は何だか氣にかゝり出した、無論出來る丈け注意を拂つて居た。

湘南の地に早く行きたいが夫れ迄に統一團協賛會の件で或る人と會見してからにしようか、そうすれば一段落付て安心して先方に靜養出來るからとの思召で二十四日午後其の人とお懇談を成さつて、あれも快諾したから安心ぢやとお喜びになり更に他の來訪客と見玉師匠の傳記に關して割合に長時間お話されたやうであつた。

廿五日は若干御疲勞の御樣子であつた。

廿六日午後統一閣で同師會を開催した模樣をお話し致した所大にお歡びになつた。どうも御樣子がいかにもお氣分惡そうなので或人の紹介で高橋侍醫の來診を請ふた處が、これは宜しくないとそれから手當方法を一變され種々新谷主治醫と御相談あつて早速看護婦を付添はしめたり酸素吸入をしたり暖房裝置を改良したり御自身も醫師のいふ通り絶對服從を遊ばした、今迄は安靜とはいふものゝ新聞も見られ手紙も應答され時には面會謝絶でも必要の時は面談されたり、たいくつの時は煙草を手にされたりして居たが夫等は一切ピタリッと廢されて規律正しく醫師の言葉をお守りになり御安靜に遊ばされて居た。

二十八日若干の血便を見たので高橋侍醫新谷博士は流動物の食事といふ事でお手當をした。

三月二日高橋侍醫の來診をお願ひして御容態を詳しく聽いた、經過は至極順調でこの調子で行けば四月の京都大法要には心配もなかるべしとさへ答へられ

たのであつた。
三日この一日頃より胃部に時々疼痛起る御樣子であつたが昨夜もあり今日も午後には其痛みが少しづゝ増して來る、牛乳やスープ重湯等をお採りになつても亦お採りにならない時でも疼痛が起る從つて夜分の安眠が充分に得られない、頓服を召上つては過されて居た。
四日胃部の疼痛は依然として續いて居た、昨日も今日も便通はないが、晩に咳嗽と共にコーヒ樣のもの少々お吐きになつた、脈膊は平素から幾分多い方であるが昨今百から百五六、呼吸は二十乃至二十一であらせられる、お食事は流動物約四〇〇瓦をお採りになつた。
五日胃部の疼痛を時々訴へられ午後に一回黑色の硬便があつた、お食事は昨日よりも少し減つた、體温や脈膊呼吸等は昨日と大差はない。
六日便通なく液體食七百四十瓦をお採りになつた昨夜はよくお眠りが出來た爲めかお氣分も爽かで時々胃部の疼痛があるのは或は胃潰瘍の惡性なものか或は流感の作用か疑問とされる點であつた。
七日體温正午に於て三十六度脈膊九十六呼吸十九昨夜は胃部の痛みであまり安眠がお出來でなかつた、夜中に黑褐色のお通じがあつた食事は六百瓦、晩痛止めの頓服を用ひられると直ちにコーヒ樣のもの約百瓦嘔吐遊ばされた。
八日體温三十六度七分脈膊と呼吸昨日より一二增加、昨夜は疼痛なくお眠が出來た、併し日中には四回ばかり胃痛あつた爲めに一日絶食される事となつた而して葡萄糖の靜脈注射を朝夕二回成さつた。
九日　一日おきのやうに今日は又お眠り少なくお氣持ちも重々しい御樣子で胃痛三回、葛湯や重湯及スープ約三百瓦其他葡萄糖注射朝夕二回と夜分にゼラチン皮下注射を行はれた、體温や脈膊呼吸には昨日と變りない。

十日昨夜は遂に安眠をおとりに成れず御疲勞御衰弱漸次加はり憂ふべき御容態に向はせられた尤も胃痛は減じて一回頓服をお用ひになつたばかり、營養注射二回施行。
十一日睡眠少なきため稍御疲勞が加はり時々疼痛起る、體温朝三十七度四分に昇つたが正午から三十六度七分、營養を出來る丈けお與へせねばといふので流動物も少々濃厚にし、葡萄糖及びリンゲルノブカエン各五百瓦の注射を施された、便通は少量宛ではあるが黑褐色のもの三回もあつた。
十二日正午體温三十六度九分脈膊百呼吸十九昨夜は宵から能く御安眠がとれた、重湯と野菜や玄米スープ葛湯等六百五十瓦を召上がり朝葡萄糖ノブカエン晩リンゲル注射を施行、午後八時頃咯痰の爲めに呼吸若干重苦しい御樣子に見受けられた。
十三日昨夜はお眠り少なく漸く二時間ばかり安眠がお出來らしかつた、その爲めか今朝は元氣弱つて見へた、體温や脈膊呼吸には大差はないがお食事はどお採りにならぬ食慾減退である、今日は猊下第六十五回目の御誕生日に相當するので數日前に同師會員一丸となつて猊下の御病癒を御祈念しようといふ相談に賛同して妙國寺に集まる事であつた、折よく小野夫人や川原夫人も參加され午後三時頃より熱誠を籠めて祈願した、あまりに力が入り過ぎて木鐘の叩く棒が叩きつぶされてしまつた、イヤナ前兆哉と直感せぬでもなかつたが四時半頃に御祈念を終つた時に都喜子夫人のお知らせに四時前に猊下はお氣分惡くお成りと共に嘔氣が來て間もなく二塊の血液凝固したやうなものをお吐きになつた、直ちに新谷主治醫に來診を乞ふて手當を施され午後十時頃に又一回ロヂノシ、ヂガーレン、コラミン、ノブカインを注射された。此の御容態を聞いては來集の同師會員も是れは大事なり一大事なり直ちに重だつたる方面に御通知せねばならぬと夫より徹夜で電話、電報、

端書といふ最善の方法で一部分へ急報した。

十四日體温三十六度四分乃至晩は三十七度五分に昇つたが脈膊は九十八から百十呼吸二十二で食慾更にない、午後三時半頃惡寒を訴へられたが二十分位で止まつた、時々コーヒ色のもの少量宛嘔吐される、憂慮すべき御容體となつて來た、吳、高橋、新谷の三博士は次の如く聲明された。

一、根本的の病氣は肺氣腫

二、心臟――以前は狹心症の兆候ありとて其手當養生を怠られざりし爲め現在に於ては其恐れなし

三、消化器内の出血（胃の終り腸の始め）惡性の潰瘍……癌腫性にて「タヾレ」たる部分よりの滲出血止まらざれば貧血次第に强まる

十五日昨夜はお眠み少なく朝六時體温三十六度八分正午三十七度三分午後六時三十七度八分其時脈膊百〇八呼吸二十七。午前十時新谷主治醫來診の際、猊下はどうも何だか頭が少しぼんやりした樣ですと申されたから主治醫は御自身でぼんやりしたと意識されるのは未だそうでない證據ですと笑はれた位であつた。猊下は久しい間お眠りになる時でも横になつたり兩足を延ばして緩々とされず單に枕を三つばかり重ねて兩手を組んで屈伏した形で過されつゝあつたが今度の御大患以來延々として横にお成り遊ばすことが出來て胸の工合も良いと喜んで居られたが今日は又以前のやうに坐つて見たいものだがと仰せられた、主治醫はそれは却ておつかれになりますから矢張り今の通り安靜になさつておいで下さいと申したのでさうかなと承伏された。午後六時高橋博士の來診の砌り輸血の話が再燃した。數日前にも輸血の話はあつたが博士は大きな犧牲を拂ふ程それ程かゝる病症には特効はないからと押へて居られたが、あまり有志の申出でが熱心でありそれは猊下の爲めには一身一家を悉く捧げても宜しいといふ涙ぐましい貴い志の人達の赤誠に博士も動かされて、夫れではといふので博士の友人松永博士に御自身電話をおかけ下さつたが幸にも直ぐ行かうとの仰せであつた、松永博士は同じく侍醫でもあり隨分お忙しい爲めにとても今晩は駄目であろうと新谷主治醫も想像されて居たが不思議にも早速と手筈が整つて十數名の血液檢査の結果三女和子夫人の血液約百五十瓦を輸血される事と成つた、猊下の御氣分甚だよくやがて安眠遊ばされた。

十六日午前一時スープ少量召上つたが二時頃より次第に御容態が良しくないカンフル注射をなし五時頃更にコラミン等の注射を施した其後十時頃に猊下は統一團協賛會へ金千圓醵出すべき旨申渡された、同師會員の將來進むべき路に就ての遺誡は既に十三日午後一時半明瞭にお與へになり今や危期刻々に迫るも猶法統愛護の大精神は極めて嚴として一貫されて居る誰か是を耳にして安逸を貪る者あろうか、肅然たるを覺ゆるであろう正午愈御危篤と聞いて蝟集する法子善男女等靜かに唱題を始めた、一時間許りの後猊下には看護の者を殘して他は全部本堂に詣でゝ唱題せよ今や一大事の時なりと仰せられた、詰かけて居た數十の人々は靜肅に本堂の御寶前に赤誠を吐露して最後の祈りを捧げた、嗚呼遂に午後四時過安詳として非滅現滅の相をお示しになつたこの大活訓は永久に目擊者の腦裡をば去らぬであろう。

（磯部謹記）

南無妙法蓮華經

編輯室より

聖應院日生上人の意外なる御遷化に常侍の者も夢心地であります、本月はなにかにつけて極めて忙しく本誌の編輯にも殆んど不眠不休で努力は致しましたものゝ甚だ不整頓の姿で皆樣にお目に懸ることは何共恐縮の至りでございますが、特別の場合特別の御寛恕あらんことをお願申上ます。（滿生）

教報

◎統一團本部教戰錄

△三月一日(第一日曜)晴、午後一時半開會、初めに法華、次で講演會に移る、當日本多猊下御不快の爲め下記三師にて代講、梶木顯正師「人類の上に法華經は何を呼ぶか(其四)」和賀義見師「立正大師降誕の眞意義」田中爾道氏「世界の動きと日本」以上、當日來會者六十餘名

△同八日(第二日曜)晴、午後一時半開會、當日は「國民教化大講演會」と銘打つて開會する事にした、講師は、中村清一氏「所謂必然論者と日蓮主義の立場」海軍中將佐藤皐藏閣下「倫敦條約と日本の覺悟」梶木顯正師「國民教化の根本義」以上、來會者百四十餘名

△同十五日(第三日曜)晴、午後一時半開會、去る十三日より俄然總裁本多日生猊下御重態の報傳はるや、信徒一同恐懼悲痛、如何にもして今一度御全快を！と熱心にそれ〴〵佛天の御加護を懇禱したのである、統一團としては本日地明會員及團員を一堂に集めて、猊下の御平癒を至心に祈願した、終つて梶木顯正師來會者一同に總裁猊下の御病狀に就き委細に報告、次で山口智光師種々團員の覺悟すべき時なるを呼び、同四時一同沈痛な面もちにて心ひそかに猊下の御全快を祈念しつゝ散會した。來會者百八十餘名

三月十六日、晴、去る十三日已來猊下の枕頭に集まつた同師會員及遺族の方々は憂愁の空氣に包まれつゝも若しや佛天三寶の御加護にて御平癒なさる事もあらんかと、團員井上道太郎氏の切なる勸めにて十五日夜十時、猊下へ輸血をする事に決し、下記十名の血液檢査をする事に成つた、(鈴木義夫、長谷川聖學、友廣和子、梶木顯正、山口智光、田中道爾、綿引弘、藤田太吉、中村清一、高矢休敎)內友廣和子夫人(猊下の第三女)の血液を百五十グラム輸血した、時に猊下には非常にお喜びになつた、との事であつたが、十一時十二時、と時間の經過と共に一同効果の如何を待つて居たが一向驗しが出て來ない遂に時を過ぎて朝(十六日)の五時全く効果の無かつた事が知れた、も早や絶望のどん底に落されたのである。期せずして一同本堂(品川妙國寺)に集り涙と共に御祈願をするのであつた。寄り合ふ人々の顏色は皆憂ひに沈んで居る、十六日午前十時、御病床の猊下より「棺の仕度が出來て居るか」とのお尋ねがあつた。愈々今日は御遷化の日か、日頃御教訓は頂いて居るものゝ一同思はず涙を呑んだのである、悲嘆の內に時は過ぎて正に午後の四時廿七分　安祥として僧俗男女遺族親戚一同の唱題裡に、顯本法華宗前管長大僧正聖應院日生上人は六十五歳を以て品川町妙國寺に御遷化になりました。嗚々　四十餘年に亘る我が思想界に殘された功績、我が佛教統一の大理想を提げて起たれた統一團の運動こそ猊下の生命であり面目である。聖應院日生上人は小にしては我が顯本法華の三大偉人(什祖、常樂院經師、聖應院日生上人)の一人であり、大にしては當代日蓮門下の第一人者であり、我が宗教界思想界の大偉人であつたのである。「肉身滅すと雖も法身在ませり」それ猊下の教恩にあづかる者起たずんばあるべからず、猊下の御遺志を遂行せずんばあらざるなり、御遺志とは何んぞや「佛祖の正脈、法統の愛護」これを措いて何があらう、起て！僧俗、護れ！團結して佛祖の正脈を！

嗚呼、猊下、聖應院日生上人　吾等の上に
　冥助を垂れ玉へ、南無妙法蓮華經

三月十八日曇り、妙國寺に於て本多猊下の密葬式執行、井村管長導師、來會する者二百餘名、山田三頁博士夫妻、妙崎正治博士等も見えて居た。

三月廿一日、晴、夜七時より統一團に於て統一團及地明會主催にて猊下の第初七日忌遠夜追悼法要執行　來會者百八十餘名、一同猊下の御生前を偲びつゝ心から御回向を申し上げた。終つて佐藤鐵太郎閣下、小西日喜師等の我等信徒に對する信念と覺悟に就いて誠に感銘深い御話があつて、特に佐藤閣下には、之れからは特に「本多上人」と云ふ事を一言でも多く云つて貰ひ度い、と一同に望んで居られた。會を閉じたのは八時半、當夜は野澤少將岩野少將等御列席下さつた。(顯正淚記)

◎正法寺便り　(早稻田南町)

△例會毎月第二日曜日(午後七時)

三月八日　聽衆七十餘名　講題及講師

人生と自己の價値　　僧正　木村　日保師

報恩と迴向　　猪又金太郎氏

○獲信四月十二日　會場正法寺　講題及講師

一大事因緣　　堀野　乾政師

宗教とは何ぞや　　木村　至誠師

未定　　僧正　木村　日保師

◎小運動手記

＝教傑ならば單獨にても教化の實績を擧げることが出來やうけれども微弱なる道念の持主にては何等の報恩行を成し得ないことを懺悔するのみである、予の小運動の最近を顧みれば二月十八日相模厚木町赤堀氏宅に鎭仰會を開いて本尊論の要旨を講す、二月廿一日横濱千歳裁縫女學校に於て法華主義の信仰の力は世相淨化の功益を招來する理義と實際を說いた、二十二日東京牛込本山別院に大乘佛教會開かる、峰大安遠なる日什大正師の高風及び主張を傳へた、二十八日飯田本美寺に開祖日什大正師の信仰正系を述べて經卷相承の大義が日蓮主義の生粹なる所以を明かにす、三月五日厚木町キネマ館に於て物心一如の基本による生活を遂めて更に信仰的生氣を得べく大上人の御教を傳へたが、近來一般に法を求むる氣分が動いて來た故か極めて靜聽に傾聽して居た、後に映畫の餘興ありて盛會であつた、十三日夜戸塚在中和田村持田氏宅に生命の水存と因果法の圓滿なる教は法華經に在るを說いて信仰の要諦を明かにす、十四日夜高座郡溝谷村保田氏宅に正しき信仰の持主は實實にして勤勉なる理義を遂ぶ、十八日厚木町淺岡氏方に鎭仰會を開き修行の方軌を講す。(三上生)

◎名古屋布教誌

一月八日　婦人初會

法話　　原田　日勇師

決算報告　　清水　一乘師

餘興　義太夫　謠引等にて盛況

一月十五日　開目抄講義會　原田　日勇師

二月五日　開目抄全卷大意　原田　日勇師

二月八日　婦人會

五時八敎　　清水　一乘師

祖文に就て　　原田　日勇師

二月十五日　法華題目抄講義　原田　日勇師

二月廿三日　豐田本社修養講演爲女工

一心と多心　　原田　日勇師

二月廿三日　豊田織機工場爲男工二ヶ所にて

犧牲精神　　原田　日勇師

二月廿四日　豐田紡切女工場講話

お多福面に就て　　原田　日勇師

◎大阪教報

一月二十二日　堂圓寺にて
法華經要義　京藤布教師
二月三日　丸尾宅にて
信仰の要旨　京藤師
二月十五日　日蓮聖人御降誕會執行、午後一時第一會場たる蓮成寺に參集中川管正導師の下に報恩法要を修し、大泉師挨拶を爲し終りて三々五々相打ちつれて第二會場たる堂圓寺に向つた、此の日天晴れ氣卿らかにして御降誕會には眞にふさはしい日であつた、堂圓寺に到るや京藤山主導師の下に一同滿腔の赤誠をこめて大聖人御降誕の恩德を謝し了り續いて講演「日蓮聖人の大慈」京藤師、延壽「佐渡の日蓮聖人」水也田香洲先生。堂の内外に溢れる參詣者感激に充ち法悦の裡に散開せしは午後五時過であつた。
二月二十二日　堂圓寺にて
法華經要義　京藤師
三月十二日　同寺にて
入信の動機と將來の覺悟　藤山本成師
現代の思想と日蓮主義　京藤義應師
何れも盛會、聽者皆感激に充ち、多大の効果を奏せり。（三月十五日記）

◎北陸教報

○一月十七日　福井市　善慶寺ニテ　妙立講々演
人の力　長美明師
○二月二日　家庭講話　若杉宅ニテ
美しき街上の人々　能仁一十師
○二月六日　福井市　妙經寺ニテ
日蓮上人御消息文を拜して　長美明師
○二月八日　天晴會　山内本行寺ニテ
精神生活と佛教　藤啓純師
○二月十日　金澤貯金局ニテ　修養講話
有難い、勿体ない、氣の善なと云ふ心　能仁一十師
○二月十二日　今庄町　善勝寺ニテ
行ふ人　白部泰學師
○二月十二日夜　今庄　善庄寺ニテ
吾等の自覺　白部泰學師
○二月十五日　音樂會　本覺寺ニテ
釋尊と觀世音　本郷常次郎氏
涅槃の意義　富元會榮師
○二月十五日　天晴會　山内本行寺ニテ
辛未と如說修行　藤啓純師
○二月十六日　粟村　蓮照寺ニテ晝夜二席
佛教に現はれたる女性　長美明師
日蓮上人の慈悲　長美明師
○二月十七日　妙立講　福井　本經寺ニテ
提婆品の大概　長美明師
○二月十九日　山内　山崎淺吉宅ニテ
眞の人間生活　藤啓純師
○二月二十一日　立正園ニテ　能仁一十師
佛教に異狀なし　能仁一十師
○二月二十二日　涅槃會　本長寺ニテ
涅槃と其後に來るもの　能仁一十師
○二月二十六日　森川五作宅ニテ
經卷相承に就いて　藤哲純師
○二月二十八日　甚木石太郎宅ニテ
釋尊の說法する所以　藤啓純師
○二月二十八日　家庭講話　河合宅ニテ
正義のために泣け　能仁一十師
○今庄村長田中氏今般一箇人にて拾萬圓を投資し建設された昭和會館大講堂に於て二月十一日記元節を卜し夜七時より少年雄辯大會を開催せり、來會者三百人中々の盛大を極めた、開會の辭　今庄少年團長、目覺めよ少年　尋五中川、些細なる事にも注意せよ　尋四吉田、時に就て　尋五京藤、少年よ自覺せよ

尋四村上、新日本の建設　高二山本、苦惱の征服　尋四川端、立志傳　尋四田中、德善の修養　尋六樋田、奮闘を期す　高二京藤、男子は玉となつて碎け　高二丹波、生活難と移民奬勵　高二提正、堪忍　高三高橋、閉會の辭　山本清治、審判員　白部泰學師、而して審判員の講評科目は態度と音量と語調の三科に就て第一回として優秀の成績を以て十時終了、最後に茶話會を開き十一時散會せり。已上

◎野田殉教地布教報

野田殉教地布教開始以來既に一年有半武田講師の獅子吼若き青年士女の耳膜に反響し今日行きつまつた世相缺陷多き世の中に宗教的修養の必要な自覺し自ら宗教運動に參加宣傳等の美事は他に知られぬ殉教の輝なり又殉教者遺族渡邊伊吉氏毎會宣傳は與て力あるもの

○一月廿日
懺悔　黑須無外
實生活と佛教　其一　武田文學士
○二月廿六日
宗教的修養　黑須無外
實生活と佛教　其二　武田文學士
以上　（野田報）

◎台中教報

二月十五日　釋尊御入滅　說教
二月十六日　聖祖御降誕會
續て　餘興　義太夫、疊屋連の珍藝百出
二月二十七日　二十八日兩日午後七時ヨリ九時半に至る　高雄州横山郡橋仔頭に於て（日蓮主義）講演
別紙新聞切抜參照
三月十二日より十三日迄二日同午後七時より嘉義市内辻說法（日蓮主義）
十四日　嘉義布教所に於て（信仰に就て）
一、十五日午後七時　斗六街に於て（日蓮主義とは何ぞ）
一、小生の辻說法は過日新聞御送り申上候通り一の名物と云ひある知くで丁度本年に至り十ヶ年を續行し來り外又臺北嘉義と路上布教は無論其の他各所に於て法莚を張り居り候處我が臺中に於て殊に十年と云ふ長年を通じ來つゝあるにも不拘小生去る一日より記念講演として日蓮主義街路布教をなしつゝ有之候處其筋より小生の布教路上に立事相叶はずとの御沙汰を受け早速小生も其の筋の其會其の意を解する不能警察署へ出頭し其の理由を問ふに文化協會取締上云云とありて致方なしとは存ずるも現に教世軍が毎夜の如く辻々に立ち布教しつゝあるを認め居るため教世軍の云云と申上たるも係り官にては左樣の事なきを主張せられるに及び一應はよし其の實證を擧げ大に戰はんと決意をなし歸宅せるに後に於て電話にて到新聞切抜きの通り場所の變更をする樣と申來り小生は念のためと書面提出せしも要領を得ず小生辻說法に就て新聞紙上に迄掲載ありしもの故へ之を實行せずしては申譯立たずとして終に指定の辻々に立ち其の筋より我が辻說法の義お差止めの理由を述べんと各所に至り教世軍は現に樂隊を以て盛んに布教しつゝ有之を認め依て茲に教世軍と警察署の間に何等かの秘密もありげに思はざるを得なかつたのでいよ／＼小生決意を爲し最後迄戰はんとし大に其の行がゝりより現狀警察署と教世軍の有樣に就て各辻に於て發表し市民の批評を乞はんと堂々と長時間を續けて歸り翌日は早速其の筋より招出さるべきを承知し翌朝他行するに必ず

何とか申來るべき事を愚妻へ申置き他行し午後に歸宅し見るに其の筋よりは三四回も電話にて申來ること「別紙切抜の通りに有之」小生歸宅して其の由を聞くや又電話あり小生耳を當るに矢張其の筋にて當局も餘程其の時はあはてゝ居たものと見へ曰く署長不在にて係長自分は署長がお許しあるを存ぜざる放逐に斯く甲上たるにて何卒辻說法は差支なきゆへ目的通り實行下さいとありこれに對し小生は云ふ、私は實は今から御伺ひ申上樣と存じて居りましたそれは救世軍が如斯く自由に辻布敎を爲し居る私にして爲すことの出來ざるは同じ宗敎家にありながら一方を許し一方を差止め理由判明を得度又救世軍に於ては如何なる書式如何なる方法を以て爲せしか夫れを相承り度然らば私に於ても同等の手續きを爲し同等のお取扱ひが願度しと存するから。兎に角今より出願可仕と電話にて申立つれば、當局は曰く、別に救世軍よりは何等の手續等は爲してはありませんと答へあり。小生然らば小生の如き正直に道を以て爲すべき者は馬鹿を見、道ならざる者は堂々と自由自在に天下晴れてのお許しとは實に世の中も進歩したものですね、それでは最初より手續等したのが惡かつた、これから手續せずともどしどし私の自由にお差支はありませんでしやうなと申たれば、當局は差支はありませんから是れから大におやり下さいと許されました。三云

別紙切抜き左の通り

▲辻說法の松鶴坊さんが例に依つて一日の夜から記念講演を市內要所の停子脚下で思想問題などを擔ぎ出してお釋迦さんの說法を交ぜて諄々と述べてゐる、一方救世軍の一隊は樂隊で囃やし立てドン〳〵ヂャン〳〵と道路にはみ出して禁酒論なんか說いてゐる佛耶玆許競演の態である

▲二日の晝松鶴坊さんに對して其の筋から辻說法の場所の變更するやう電話があつたので念のため一應屆書を出したが何うしても要領を得ないので三日の夜は辻說法取消しの斷はりの文句を並べて街頭に起つと相變らず救世軍はブカ〳〵ドン〳〵とやつて居る、松鶴坊さん堪り兼ね斯うなれば我黨の大問題だとばかり大いにフンガイし其の筋へ交涉すると敦圉いて居たが昨日澤井署長から辻說法は差支ないとの命令が出た夫れに就き

▲ヤツと出勤した病氣上りの澤井署長は辻說法事件に對して『夫れは何かの間違ひでせう未だ耳にしないが二月頃から辻說法をしても差支へないと松鶴君に言つてある……(台灣新聞)

▲題本法華の松鶴妙明師、臺中、臺北、嘉義と三箇所を受持ち、東奔西走の布敎、臺中では既に

六十軒の檀家が出來た

▲本年は宗祖日蓮上人の六百五十年祭だから、妙明師十二日から三日間嘉義で大道布敎、斗六でも一日やる(臺南新報三、一三)

▲けふから春季彼岸に入つた、各寺院布敎所では例に依つて法要修行、說敎、講演等がある

▲題本法華の松鶴妙明師は十九日から三日間每夜市內適所に於て辻說法を試み、中日には同寺に於て法華經の人生觀と云ふ演題で說敎をやると(臺灣新聞三、一八)

讀者の聲

(前略)次に私愛藏中の書籍中恩師の『法華經の心髓』『開目鈔詳解』及び『聖訓要義十冊』何れも貸與の儘遂に返却なく轉々不明となり今日絕版の折柄全く取りかへしの付かぬ事と相成り如何にも殘念に心得居申候。其後も各方面に古本にてもと思ひ探索候へ共一も無之今さら難遺戀慕如何とも難致を覺へ申候て今日の出版自由に求め得らるゝ事とのみ思ひ秘藏すべき心得を失ひたるを悔居申候、殊に昨年來段々各所に傳導の機會有る每に是等の御著書の指針となる事を痛感し是非なんとか仕度くと存じ候、此の上は飽迄其數に接し度く原本の要處筆寫の考に御座候處幸に聖訓要義は地方にて貸與を受け其目的を果し申候へ共開目鈔詳解と法華經の心髓は地方に貸與を受くべき藏書無之大に困り居申候、若し何誰か御秘藏の御方あれば先づ開目鈔は次ぎとして、法華經の心髓を先きに御貸與を受け(期日約壹ヶ月以內)要點筆寫申度希望に御座候處どなたか御紹介被下る事出來不申候哉洵に勝手至極に存候へ共此義宜敷伏而御願申上候

猶恩師猊下に御談の序も御座候はゞ例令出版書籍にして自由に幾冊にても買ひ受けらるるとて之を散逸せしめては將來に到つて臍をかむの時あるべく、貴き書物はよし自由に求め得らるるとしても尊重愛藏すべきものに候求むるに得られずして聖訓要義十冊の筆寫の努力はよく此の愛書の觀念を痛切に体驗させられ候旨御談し被下候て御講演の折りにも一言門下の方々に御注意の御慈愛を垂れ給はれん事を御

依頼被成下候樣伏て願上申候　拜具

月　日　　岡本忠道

妙國寺

執事様

（執事曰、岡本氏は熱誠なる護法家にして數百里を遠しとせず四國より遙々日生猊下の聽法隨喜のため來上された事屢々でした）

（前略）次に本月初旬顯本教報二月號一讀致し尚に遺憾に存じ居候、元來私共夫婦は從來無信仰に過し居候處大正十三年十月一夕廣告を見て講師はドンナ人でドンナ事を言ふか位の考にて猊下の御講演を拜聽仕り私共夫婦は初めて醒め即時入門を決心仕り直ちに上田上人へ其旨申出で爾來信仰持續致居候處昨秋山妻は四十三歳を以て死去致候、幸にも山妻は篤き信仰を持續致し、死の約十日前○○氏御來訪三井流義にて病氣は自分（○○氏）の祈禱にて即時消へ去り必ず治癒すべし依て心を鎮め心中にて靜かに唱題せよとて約二十分間何か唱へながら祈禱し明日を約して去られ候、病苦の最も激甚なりしに拘らず彼女は此の祈禱を排して申候は正體の判らぬ唱へ言は謗法とならんも知れず謗法にて生き永らへんよりは此儘死せば成佛ならんとて武田萬次郎氏外數氏の同信者の純信の御祈念を喜び生きても死んでも結構と申し夫より五日後に到り私共に在世中の謝辭を述べ終るやお題目を五六回一大音聲に唱へ爾後一言も發せず病苦をも訴へず上田師京藤師大泉師等より臨終の教を聞き三日の後安かに臨終致候右お上人方より過賞の辭を受け殘る私の信仰は增進し妻の死は信仰を增し此上の幸福も無之朝夕感謝致居候之れ偏へに猊下御教訓の賜に外ならず候茲に深く御洪恩を御禮申上候次第に御座候、更らに在阪同信者にて篤信の人々は皆猊下の御講演にて改宗轉派したる人にて大阪蓮成寺堂閣寺の信者の重立つ人は概ね猊下の御教化を蒙りたる者と稱すべきにかの管長の訓示に「七重八重花は咲けども」云々とは噫　是れ弟子たるものゝ師匠に對する態度にて候か筆にするだに不快を覺へ申候　大阪教團の人々は猊下の御健康御回復と共に御温容に接するの一日も速かならん事を祈らぬ人は無之候次第に御座候　先は右得御貴意度候

恐々謹言

二月末日

本多日生猊下

（一月五日井村管長の訓示に對して不穩と認むる個所が深山あります）

樋口繁次郎拜

願れば小生二十歳の秋（大正十二年）猊下の御著日蓮聖人正傳に御指導を受けてより以來はや八ヶ年大正十三年の春非常なる感激を以て僧門に入り（高知市の某寺）現在の宗團に屬し居候されど入門しはせしものゝ御指導を受けし事と宗門内の空氣とは大分の相違有之大いに苦しみ國柱會の書籍にも接し得る所も有之候處其の爲師僧より破門せられ只今の處に來る事と相成候

其の後國柱會の書籍にて一ヶ年程も熱心に勉强致候處本尊の問題に於て了解し難き處有之苦しむ事半歳其の後圖らずも本多猊下の日蓮主義精要を讀む事と相成豁然として日頃の疑問は氷解せられ歡喜に不堪候此の喜びを人にも知らせんと思ひ友達にも進め進んで法華經要義仝講義日蓮主義本領聖語錄等を讀みて共々に御指導相受居候

眞に小生は本多猊下によりて暗夜に燈火を得たるが如く終生忘るべからざる善智識に御座候

小生の信仰の足らざる故に未だ一度も本多猊下の直接の御身口に接し得ざるは誠に殘念に御座候

茲に本多猊下の御遷化の報に接し思ひ出づるまゝに亂筆不文をも不顧書きつけ申候何卒御免下され度今後共相變らず御指導の程奉願上候　合掌

三月廿一日

門脇教芳

統一誌發行所

御同人様

聖應院日生上人の
御肖像畫頒布

大阪の或る特志家が卷頭に掲載せる日生上人の永久不變色の御肖像畫約美濃紙大のもの壹葉金貳圓の特價で奉仕さるゝそうですから御希望の方は當方に御申込み下さらば便宜上取纏めて先方に依頼を致します、緒切りは四月中郵送料は遠近に應じて御添加の事　以上

東京市外南品川町妙國寺内
統一誌發行所
振替東京五一〇七一番

御注意

一 普通誌料は總て前金に願上ます
一 前金切御注意致し三ケ月に及ぶも御拂込みなき場合は御入金迄御送本見合せます
一 集金郵便は金參圓以上で其取立てには誌料の上に金拾錢の集金料を添加致します
一 金五拾錢以下の誌料には領收證は差上げませぬ
一 切手代用は一割増に願ひます
一 御轉居の節は必ず新舊双方を御明記(可成階書)御通知願ひます
一 御照會には返信料添付されたいものです

誌料領收

自昭和六年二月廿一日
至同　年三月廿日

一金六圓也　札幌　本澤隆正殿
一金五圓也　東京　野島連平殿
一金六圓七拾錢也　品川　大島良太郎殿
一金四圓五拾錢也　東京　渡邊ゆき殿
一金壹圓也　富山縣　石原重太郎殿
一金四圓五拾錢也　東京　大橋唐太郎殿
一金四圓五拾錢也　同　大河原徹殿
一金拾五圓五拾錢也　同　清水佐太郎殿
一金四圓五拾錢也　同　高橋典市殿
一金四圓五拾錢也　同　山本信次殿
一金四圓五拾錢也　同　坂爪德太郎殿
一金四圓五拾錢也　同　古田慶三殿
一金貳圓貳拾錢也　茨城縣　中崎米殿
一金五圓也　同　高崎克喜殿
一金拾壹圓拾錢也　靜岡縣　井上日光殿
一金六圓七拾錢也　大阪　清水政義殿
一金參圓也　高岡　古谷孫左衛門殿
一金五圓也　愛知縣　本常寺殿
一金五圓九拾錢也　千葉縣　渡邊真一殿
一金拾壹圓拾錢也　東京　田中慶三郎殿
一金壹圓貳拾錢也　同　青山信市殿
一金五圓也　茨城縣　本圓善之助殿

一金四圓五拾錢也　西宮　山本小四郎殿
一金四圓五拾錢也　室蘭　廣瀨嘉秀殿
一金貳圓貳拾錢也　奈良縣　出口馬太郎殿
一金壹圓拾錢也　秋田縣　加賀谷德治殿
一金拾五圓五拾錢也　東京　鈴木孝雄殿
一金貳圓貳拾錢也　津山　渡邊孝殿
一金五圓也　宇都宮　佐藤豊太郎殿
一金七圓也　神戸　河内仁三郎殿
一金五圓也　東京　新田日註殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪府　小池芳雄殿
一金貳圓貳拾錢也　廣島縣　河井カズマ殿
一金六圓七拾錢也　東京　内藤健三殿
一金貳圓貳拾錢也　同　高田保太郎殿
一金參圓五拾錢也　川崎　廣瀨調殿
一金貳圓貳拾錢也　彦根　林田芳太郎殿
一金壹圓貳拾錢也　大阪　新見辻平殿
一金八圓貳拾錢也　神戸　熊井本光殿
一金四圓五拾錢也　千葉　片岡啓輔殿
一金四圓五拾錢也　同　並木博殿
一金六圓七拾錢也　豊橋　服部彌八殿
一金貳圓貳拾錢也　岡　田村仙作殿
一金拾五圓五拾錢也　愛知縣　澤田傳八殿
一金六圓七拾錢也　靜岡縣　齋藤直殿
一金貳圓貳拾錢也　明石　梶川福太郎殿

一金拾參圓參拾錢也
一金拾壹圓拾錢也
一金貳圓貳拾錢也
一金拾參圓參拾錢也
一金四圓四拾錢也
一金八圓九拾錢也
一金四圓五拾錢也
一金壹圓貳拾錢也
一金四圓五拾錢也
一金四圓五拾錢也
一金拾參圓參拾錢也
一金四圓五拾錢也
一金壹圓貳拾錢也
一金五圓也
一金貳圓貳拾錢也
一金拾參圓參拾錢也
一金四圓五拾錢也
一金八圓九拾錢也
一金八圓九拾錢也
一金八圓九拾錢也
一金拾壹圓拾錢也
一金六圓六拾錢也
一金拾參圓參拾錢也

津山　井上幾二郎殿
栃木縣　木村喜知次殿
北海道　林啓太郎殿
盛南州　平川一彦殿
靜岡縣　本覺寺殿
東京　小金德藏殿
千葉縣　石川忠一郎殿
同　上原濱次殿
名古屋　金丸和夫殿
大阪　鈴木淨蓋殿
兵庫縣　田中常盛殿
岡山市　福野紋七殿
福井縣　増田太三郎殿
京都府　平野吉右衛門殿
大阪　中村義人殿
同　虎谷喜太郎殿
小田原　中村銀藏殿
津山　林伊平殿
岡山　杜岳龍華殿
島根縣　加納廣淳殿
福岡　曾我幸四郎殿
久留米　妙正寺殿
東京　若林よね殿
名古屋　小菅三郎殿

一金拾五圓五拾錢也　下ノ國　白石研輔殿
一金拾圓也　千葉縣　古宇田儀兵衛殿
一金拾壹圓拾錢也　愛知縣　大野一造殿
一金拾參圓參拾錢也　靜岡縣　河合金作殿
一金貳圓貳拾錢也　兵庫縣　笹井つた殿
一金四圓五拾錢也　函館　大窪樊妙殿
一金參圓四拾錢也　名古屋　吉田榮藏殿
一金四圓五拾錢也　茨城縣　高島秀吉殿
一金六圓七拾錢也　京都府　細谷祐忠殿
一金貳圓八拾錢也　福岡縣　西島仁精殿
一金八圓六拾錢也　久留米　中原通應殿
一金壹圓四拾錢也　東京　笠原銀次郎殿
一金拾參圓參拾錢也　青森　加藤庄五郎殿
一金拾參圓參拾錢也　千葉縣　大塚次郎造殿
一金六圓六拾錢也　豐橋　倉橋繁治殿
一金拾參圓參拾錢也　京都府　布目潮深殿
一金八圓九拾錢也　水戸　前刀寶清殿

右鄭有入帳仕候也

追記
振替貯金の氏名を磯部滿事に變更致
申候番號は從前通り東京五一〇七一
番に御座候

「統一」會　計

御案内

來ル四月十一日ヨリ十五日ニ至ル五日間修行

一、日蓮大聖人六百五十遠忌　天童音樂大法要

一、國祠堂施主祖先靈法要
一、教學財團賛員祖先靈法要
一、立正結社々員祖先靈法要
一、施餓鬼法要

——毎朝六時修行——
（十五日午前十時修行）

一、大講演會（四月十一日夜七時市公會堂）講師　大僧正井村日成猊下　海軍中將佐藤鐵太郎閣下　法學博士宮本英雄先生

一、同　上（十二、十三日、夜七時本山講堂）講師　大僧正井村日成猊下外　布教師數名

一、說　教（毎朝七時十一、二、三日午後三時）講師　仝　上

一、僧俗大會（十四日午後二時市公會堂管長訓示、講演、記念品、祭當選星）

一、同　餘興（仝日午後六時仝所狂言、琵琶講談、武敎節、淨瑠璃等）

一、屋外傳道（三月十五日ヨリ十月十三日迄京都市內各所）

一、本山什寶紀州道成寺　安珍清姫の鐘展觀

右之通リ虔修致シ候條御繰合セ多數御參詣被下度此段御案内申上候

京都市寺町二條下ル
（電車河原町二條下車）

總本山　妙滿寺

電話「上」八六番
振替口座大阪四六二五九番

謹告

本誌主筆本多日生上人の急遽御遷化に遭ひ吾等悲痛の極みに御座候
嗚呼本誌過去三十年の尊き歷史を省る時に同人は熱涙を奮つて日生上人の本旨を奉じ一路專心本誌の名譽を繼續致さゞる可からずと存申候
日生上人御最後の嚴訓に照し且つ又幸にも殘されたる幾多の玉稿をも順次揭載可仕候間本誌を介して日生上人に御親近被成下度候
從來本誌御愛讀の諸賢は此際日生上人の敎恩と其慈誡とを御追想被遊何卒最大の御後援たまわり度、本誌は今日迄主筆上人の精神的及び物質的兩方面の獨力經營に御座候處爾今此等の重任は直ちに吾等の双肩に荷負さるゝものと相成り隨つて猊下の記事なければ講讀中止といふ如きことなく何卒一同の協心戮力以て爲法國健闘致すことこそ日生上人の大法恩に酬ゆる一端かと拜察仕候間宜敷御指導之程奉懇願候

右謹で御挨拶申上候　合掌

昭和六年三月彼岸會
聖應院日生上人初七日忌逮夜

統一編輯部一同

目次

日蓮主義の特色（上篇）……故本多日生
所感……佐藤鐵太郎
實在の信仰につひて……中村清一
記事
○野口上人の來信
○時友氏訃
○各地教報
○誌料領收

第三十六年五月號

絶好の機會！

大僧正故本多猊下最近の名著四種左の通り特價提供す
吉凶共に此等の贈答は自他の法益極めて甚大ならん
部數に限りあれば品切れとならぬ間に即時御申込あれ

一 法華經要義　定價 金參圓　送料 十四錢
一 日蓮主義心髓　定價 金壹圓八拾錢　送料 十錢
一 日蓮主義精要　定價 金參圓五拾錢　送料 十六錢
一 日蓮主義本領　定價 金貳圓五拾錢　送料 十二錢

今月中に限り一部賣は二割引
十部以上十九部迄二割五分引
二十部以上四十九部迄三割引
五十部以上九十九部迄三割五分引
百部以上は特に破格割引　送料は實費を申受く

申込所　東京市外南品川町妙國寺內「教」發行所　振替東京一〇九五〇番

統一定價		
一冊	金貳拾錢	送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共

前金之事

統一廣告料	
表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾五圓
半頁	金九圓
四分一頁	金五圓

前金之事

昭和六年三月廿四日印刷納本
昭和六年四月一日發行（第四百三十三號）

神奈川縣橫濱市磯子區磯子町廣地一四八
編輯發行人　磯部滿事
印刷人　鈴木日雄
東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地
印刷所　郡印刷所　電話高輪六〇二四番
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　統一發行所　振替東京五一〇七一番

不許複製

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ